

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 15 集

(庵寺山古墳・五ヶ庄二子塚古墳)

1990

宇治市教育委員会

宇治市埋蔵文化財発掘調査概報

第 15 集

(庵寺山古墳・五ヶ庄二子塚古墳)

1 9 9 0

宇治市教育委員会



庵寺山古墳出土家形埴輪



庵寺山古墳出土土緒付円筒埴輪



(1) 家形埴輪 1



(2) 家形埴輪 2



(1) 家形埴輪 3



(2) 家形埴輪 4

序

宇治市教育委員会では、文化庁から国宝重要文化財等保存整備費補助金を、京都府から文化財緊急保存費補助金の交付を受け、市内に存在する重要な遺跡や緊急に保護・調査しなければならない遺跡に対して昭和62年度より計画的に発掘調査を実施しております。

平成元年度では、京都府下有数の大型円墳である庵寺山古墳と大型前方後円墳の五ヶ庄二子塚古墳の発掘調査を実施しました。

庵寺山古墳では、今後の予備調査として埋葬施設の範囲や埴輪列を明らかにし、多数の家形埴輪を発見しました。また、五ヶ庄二子塚古墳では、内容確認に伴う調査として、古墳を取り囲む堤の状況を明らかにし、本古墳の築造方法についての多くの知見を得ることができました。

本書は、この2件の発掘調査成果を一冊にまとめたものであります。本書が広く宇治の歴史を知る機会となり文化財保護に役立つことを願うものです。

最後になりましたが、調査にご理解とご協力をいただいた土地所有者の方々を始め、調査にあたりご指導賜った関係者、調査に直接従事していただいた方々に対して心よりお礼申し上げます。

平成2年3月

宇治市教育委員会

教育長 岩本昭造

例 言

- 1、本書は、平成元年度宇治遺跡群発掘調査事業として実施した調査の概要報告書である。
- 2、本書が収録する発掘調査対象遺跡は下記のとおりである。

名 称	種 類	時 代	所 在 地	調 査 期 間
庵寺山古墳	円 墳	古墳前期	広野町丸山89番地	平成元年7月～10月
五ヶ庄二子塚古墳	前方後円墳	古墳後期	五ヶ庄大林50番地他	平成元年11月～2年2月

- 3、本発掘調査事業の経費は5,030,600円であり、文化庁より国宝重要文化財等保存整備費補助金としてその1/2を、京都府より文化財緊急保存費補助金としてその1/4をえた。
- 4、本発掘調査事業の組織は下記のとおりである。

調査主体者	宇治市教育委員会		
調査責任者	宇治市教育委員会	教育長	岩本昭造
調査担当者	同	社会教育課 主事	杉本宏
	同	社会教育課 主事	前田暢
調査事務局	同	参 事	頼成綾子
	同	社会教育課 課長	池田正彦
	同	社会教育課 文化係長	吉水利明
	同	社会教育課 主任	山本敦子
	同	社会教育課 主事	梅田正人

- 5、本発掘調査事業実施にあたって下記の機関・各位より調査指導を賜った。

京都府教育庁文化財保護課・京都府立山城郷土資料館、金村允人(京都府教育庁文化財保護課記念物係長)・高橋美久二(京都府立山城郷土資料館館長補佐)・中谷雅治(京都府埋蔵文化財調査研究センター次長)。(以下順不同、敬称略)。

- 6、本発掘調査事業の参加者は下記のとおりである。

調査補助員 内田貴則・岡本勝人・竹村 充・中川 健・堀 泰隆
 調査整理員 大前朋恵・志村みどり・長谷川陽子・前田昭代・山岡万里子
 調査作業員 稲木富三郎・小山光男・沢井 勇・高山一夫・村田 弘・松本末政

- 7、本発掘調査事業実施にあたって下記のご協力を賜った。

近畿財務局京都財務事務所・京都府用地課・日本タクシー株式会社・広野丸山自治会・三軒屋町内会・岡屋水利組合・岡屋連合町内会・西方寺、水谷光孝・寺尾元昭・平井雅治・平石幸晨・奥田茂英・安本邦三・小山一義・片山哲夫・藤原了孝。(敬称略、順不同)。

8、調査期間中に下記の方々のご教示を得た。

京都大学文学部博物館、堤圭三郎・森下 衛(京都府教育庁文化財保護課)、山田良三(向日市文化資料館)、平良泰久・磯野浩光・伊野近富(京都府埋蔵文化財調査研究センター)、菱田哲郎(京都大学文学部助手)、高橋克壽(京都大学大学院)、日高 慎(同志社大学学生)。(順不同、敬称略)。

9、本書が使用する庵寺山古墳遺物写真は、寿福 滋の撮影によるものである。

10、本書の編集は社会教育課が行い、編集実務及び執筆を杉本宏が担当した。

11、本書が収録する遺跡の位置は、下図のとおりである。



本文目次

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要

1. はじめに	1
2. 位置と環境	2
3. 過去の調査	6
4. 調査の経過	9
5. 遺構	11
6. 遺物	15
7. まとめ	36

II. 五ヶ庄二子塚古墳平成元年度発掘調査概要

1. はじめに	39
2. 位置と環境	41
3. 調査の経過	47
4. 遺構	48
5. 遺物	53
6. まとめ	55

挿 図 目 次

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要

第1図	庵寺山古墳位置図	1
第2図	昭和49年頃の庵寺山古墳周辺地形図	2
第3図	平成元年の庵寺山古墳周辺地形図	3
第4図	古代の地形と周辺の古墳・寺院	4
第5図	付近出土遺物	5
第6図	昭和19年出土の形象埴輪実測図	7
第7図	昭和50年出土の埴輪	8
第8図	トレンチ配置図	10
第9図	遺構平面図	12
第10図	トレンチ東西方向土層図	13
第11図	墳頂部埴輪列実測図	14
第12図	盗掘壊出土の鎌	15
第13図	鱗付円筒埴輪 1 実測図	17
第14図	鱗付円筒埴輪 2 実測図	18
第15図	鱗付円筒埴輪 3 実測図	19
第16図	鱗付円筒埴輪 4 実測図	20
第17図	円筒埴輪片・朝顔形埴輪実測図	21
第18図	家形埴輪 1 実測図(正面)	24
第19図	家形埴輪 1 実測図(左側面・断面)	25
第20図	家形埴輪 2 実測図	26
第21図	家形埴輪 3 実測図	27
第22図	家形埴輪 4 実測図	28
第23図	家形埴輪 5 実測図	29
第24図	蓋形埴輪実測図	32
第25図	蓋形埴輪A復元図	33
第26図	蓋形埴輪B復元図	34
第27図	甲冑形埴輪実測図	35

第28図	甲冑形埴輪の類例	35
------	----------	----

II. 五ヶ庄二子塚古墳平成元年度発掘調査概要

第29図	古代の地形と周辺の古墳	40
第30図	五ヶ庄二子塚古墳と周辺の地形	41
第31図	五ヶ庄二子塚古墳周辺の地籍図	42
第32図	大正年間出土の埴輪	43
第33図	五ヶ庄二子塚古墳昭和46年測量図	44
第34図	外濠出土の須恵器	45
第35図	「萬福寺山内古図」に描かれた西方寺と二子塚古墳	46
第36図	五ヶ庄二子塚古墳地形図	48—49
第37図	トレンチ土層図 (1)	49
第38図	トレンチ土層図 (2)	50
第39図	トレンチ土層図 (3)	51
第40図	トレンチ土層図 (4)	52
第41図	縄文土器実測図	53
第42図	埴輪実測図	54
第43図	弥陀次郎川の流路	56

図 版 目 次

原色図版第 1 庵寺山古墳出土家形埴輪	原色図版第 3 (2) 家形埴輪 2
原色図版第 2 庵寺山古墳出土鱗付円筒埴輪	原色図版第 4 (1) 家形埴輪 3
原色図版第 3 (1) 家形埴輪 1	(2) 家形埴輪 4

庵 寺 山 古 墳

図版第 1 (1) 古墳遠景(北東から)	図版第 10 (1) Nトレンチ埴輪列検出状況
(2) 古墳遠景(西から)	(東から)
図版第 2 (1) 古墳近景(北から)	(2) Nトレンチ埴輪列検出状況
(2) 古墳近景(南から)	(北から)
図版第 3 (1) 古墳の遺存状況(西から)	図版第 11 (1) 家形埴輪 1〔正面〕
(2) 古墳の遺存状況(東から)	(2) 家形埴輪 1〔右斜め〕
図版第 4 (1) 墳頂部調査前の状況	図版第 12 (1) 家形埴輪 2〔正面〕
(南から)	(2) 家形埴輪 2〔右斜め〕
(2) 盗掘壕の状況(北から)	図版第 13 (1) 家形埴輪 3〔正面〕
(3) 墳頂部の墓石	(2) 家形埴輪 3〔左斜め〕
図版第 5 (1) 調査地全景(南から)	図版第 14 (1) 家形埴輪 4〔正面〕
(2) 調査地南部(南から)	(2) 家形埴輪 4〔右斜め〕
図版第 6 (1) 粘土槨検出直後の状況	図版第 15 家形埴輪 5〔高床式・入母屋〕
(北から)	図版第 16 (1) 家形埴輪片
(2) 粘土槨完掘状況(北から)	(2) 甲冑形埴輪
図版第 7 (1) 粘土槨完掘状況(西から)	図版第 17 (1) 蓋形埴輪 A〔立飾り〕
(2) 粘土槨完掘状況(東南から)	(2) 蓋形埴輪 A〔傘部〕
図版第 8 (1) Sトレンチの状況(北から)	図版第 18 (1) 蓋形埴輪 A〔傘部〕
(2) N ₂ トレンチの状況(南から)	(2) 蓋形埴輪 B〔傘部〕
図版第 9 (1) Nトレンチ埴輪列と墓壇掘	図版第 19 鱗付円筒埴輪 1
方(南から)	図版第 20 鱗付円筒埴輪 4
(2) Eトレンチ断ち割り状況	図版第 21 鱗付円筒埴輪 2
(東から)	図版第 22 (1) 鱗付円筒埴輪 3

- 図版第22 (2) 鱗付円筒埴輪片
 図版第23 (1) 円筒埴輪片
 (2) 円筒埴輪透し孔片

- 図版第24 (1) 円筒埴輪口縁部片
 (2) 朝顔形埴輪

五ヶ庄二子塚古墳

- | | |
|-------------------------------|----------------------------------|
| 図版第25 航空写真(昭和57年撮影) | 図版第31 (1) 01-6 トレンチ西端埴輪出土状況(東から) |
| 図版第26 (1) 西側堤の状況(南東から) | (2) 01-7 トレンチの状況(北から) |
| (2) 西側堤の状況(南から) | 図版第32 (1) 01-8 トレンチの全景(東から) |
| 図版第27 (1) 南側堤の状況(北西から) | (2) 01-8 トレンチ上部の状況(北東から) |
| (2) 南側堤の状況(西から) | 図版第33 (1) 01-8 トレンチ断ち割りの状況(東から) |
| 図版第28 (1) 01-1 トレンチの状況(北から) | (2) 01-8 トレンチ断ち割りの状況(西から) |
| (2) 01-1 トレンチ濠側斜面の状況(東から) | 図版第34 出土遺物(埴輪：1～7, 近世陶器：8・9) |
| 図版第29 (1) 01-3 トレンチの状況(南から) | 図版第35 (1) 縄文土器(深鉢片) |
| (2) 01-4 トレンチの状況(南から) | (2) 縄文土器(細片) |
| 図版第30 (1) 01-5 トレンチ東端の状況(北から) | |
| (2) 01-5 トレンチ西半部の状況(東から) | |

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要

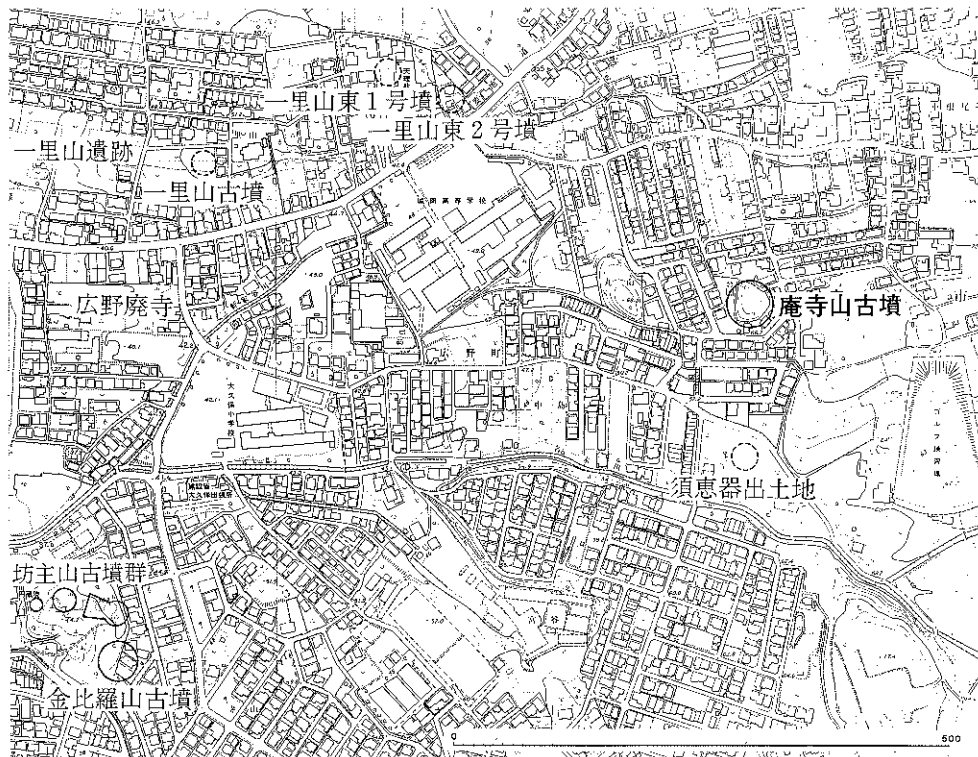
1. はじめに

庵寺山古墳^{あんでらやま}は、宇治市広野町丸山89番地に所在する直径56mの府南部有数の大型円墳であり、現在は住宅地に取り囲まれ雑木林として旧状を留めている。本墳が庵寺山と呼ばれるのは、近世末期に廃寺となった熊耳庵^{ゆうじあん}が近傍に所在したことによると伝えられ、現在も古墳上に数基の江戸期の墓石が残されている。

本墳の調査は、後述するとおり過去3回程実施されているが、いずれも部分的なものに留まっており、具体的な内容は不明な点が多かった。このような状況から、本市教育委員会では、本市最大の円墳である庵寺山古墳の状況確認調査を実施することとなり、本年度は墳頂部において予備調査を実施した。

今回の調査の目的は、主体部の位置・形式・規模及び遺存状況の確認と墳頂部外表施設の確認であり、現地調査は平成元年7月24日から10月3日まで行なった。

調査については土地所有者の水谷光孝氏のご理解を賜るとともに地元町内会及び関係機関のご協力をいただいた。心から感謝の意を表わしたい。



第1図 庵寺山古墳位置図

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要

2. 位置と環境

A. 立地

庵寺山古墳が所在する広野町丸山は、その東方に広がる標高120m程の宇治丘陵から西に向ってのびる支丘陵の西端部にあたり、古墳が立地する丘陵部の標高は65m程、丘陵幅は100m程となっている。丘陵上と丘陵の北及び南側の谷部との比高差は15m程であり、南側の谷部には名木川が西に向って流れている。

古墳は、丘陵上の北側斜面寄りに築かれており、古墳頂部の標高は75.5m程である。古墳頂部からの眺望はすこぶる良好で、北西方には巨椋池干拓地をとおして乙訓地方を、西方は木津川をとおして男山丘陵を、南西方は田辺町一帯を一望のもとに見渡すことができる。

B. 古墳の現状

古墳は、現在、四周を住宅に取り囲まれ、竹・雑木の雑木林として残っている。古墳の周囲は、住宅地との区切りのため擁壁やフェンスが構築されており、西側での擁壁の高さは4m程となっている。古墳への進入路は、古墳東側にある店舗と住宅との間の小道だけである。

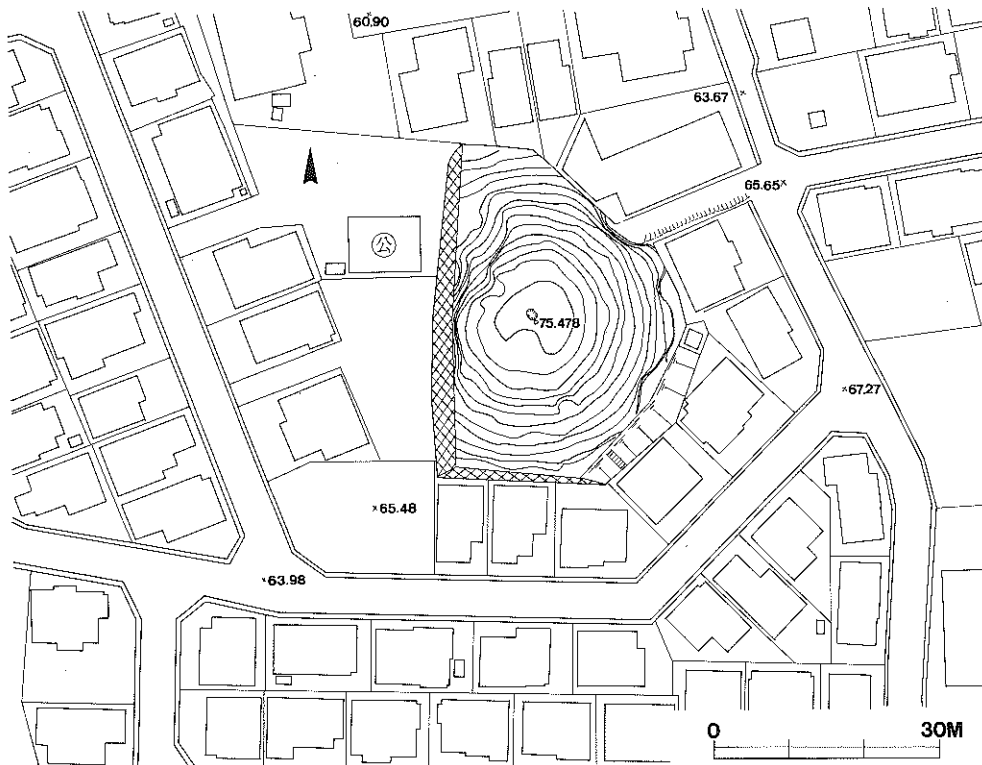


第2図 昭和49年頃の庵寺山古墳周辺地形図

2. 位置と環境

古墳周辺がこのように閑静な住宅地として開発されたのは昭和50年のことであり、それまでは、古墳北側の丘陵斜面部に住宅が数棟建てられていたのみで、他は竹林ないしは畑として利用されていた。開発前の地形図を見ても理解できるように、丘陵上は比較的平坦であり、庵寺山古墳以外には古墳を思わせる高まりを認めないため、本墳は単独墳として存在していた可能性が高い。また、前述した古墳周囲の擁壁は、周囲の宅地開発に伴い、宅地面が旧地形より切り下げられたためにできた法面を保護したものである。現在、住宅地内の道路により古墳を見るとかなりの高さを感じるのは、この宅地面切り下げのためである。

墳丘の現況は、開発により墳丘裾部を削られているため、本来の規模より一回り小さくなっているものの、全体として比較的良く旧状を留めていると考えられる。墳丘西斜面には、高さ4m程の崖があるが、これはかなり以前に住宅の壁土や筍栽培の土取りにより削られたものであり、開発前の地形図にもこの崖は記されている。墳頂部は、南半部が若干低くなり、削られた可能性を示すが、この部分に江戸末期の墓が残されているため、墳頂部南半の削平は江戸末以前のことと思われる。墳頂中央部には、直径1m程、深さ2m程の盗掘坑^{註1}が^{註1}あいていた。この盗掘が行なわれたのは昭和40年代後半頃と推測され、これが本墳における最後の盗掘であったと思われる。



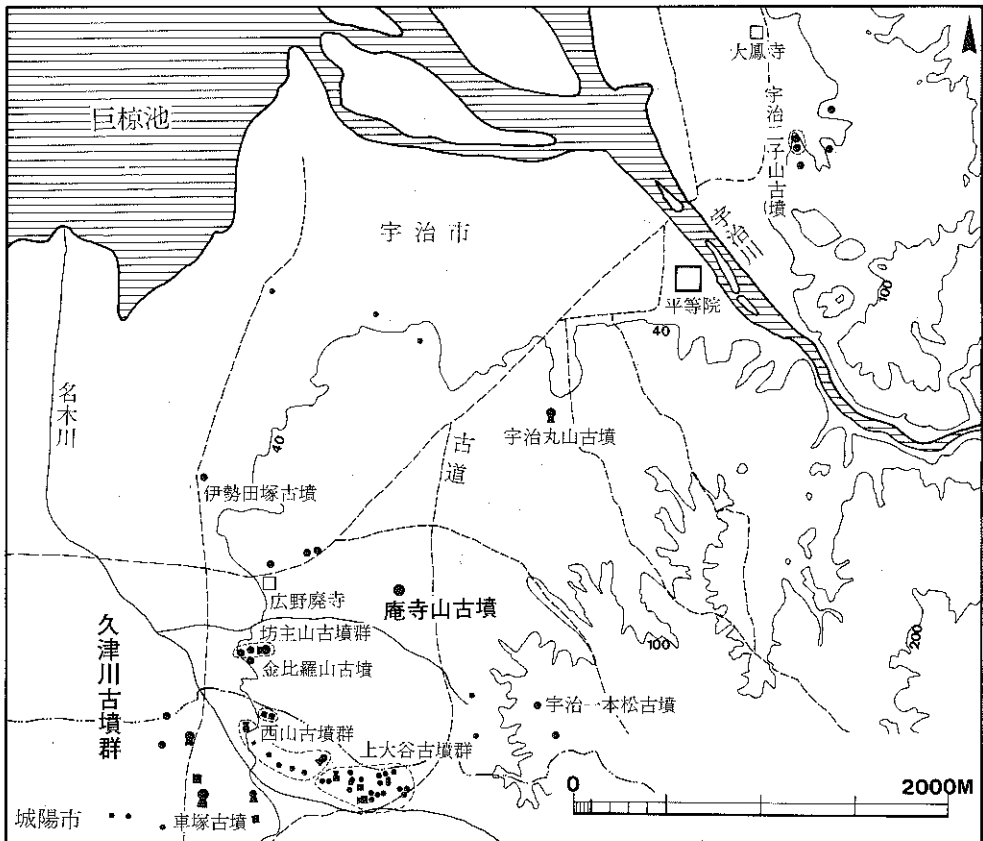
第3図 平成元年の庵寺山古墳周辺地形図

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要

C. 歴史的環境

庵寺山古墳は、城陽市北部から宇治市南部にかけて100基程の古墳が集中する久津川古墳群の北東端に位置している。久津川古墳群は、古墳の分布状況から、大谷川流域の中心域と名木川流域の北部域に分けることができる。前者は、古墳群の盟主墳である久津川車塚古墳(180m)や芭蕉塚古墳(120m)などの大型前方後円墳を始め、西山古墳群・上大谷古墳群・芝ヶ原古墳群・円塚古墳群などの支群が築かれ、かなりの密集性が看取できるのに対し、後者は古墳の密集性に乏しく対象的な有様となっている。

久津川古墳群の形成は古墳時代前期より始まり、中期に至って久津川車塚古墳・芭蕉塚古墳・丸塚古墳などの大型前方後円墳や青塚古墳・梶塚古墳などの大型方墳の築造でその頂点に達し、後期になるとともに急速に衰退する動向が指摘されている。庵寺山古墳は、久津川古墳群が最盛期を向える直前に築造されており、かつその規模は、三角縁神獣鏡を出土した同時期の芝ヶ原11号墳(径56m)とともに群内における最大級の円墳として、重要な位置を占めているといえる。



第4図 古代の地形と周辺の古墳・寺院

さて、次に周辺の遺跡の状況を概観したい。久津川古墳群北部域の中で、すでにその内容が明らかになっているものに、宇治一本松古墳・金比羅山古墳・坊主山1号墳・同2号墳・伊勢田塚古墳が挙げられる。

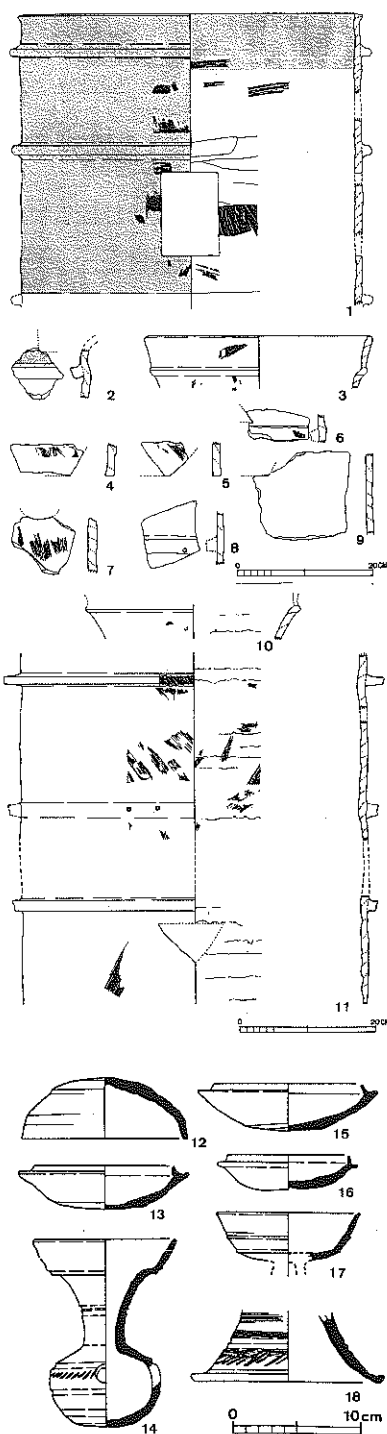
宇治一本松古墳は、名木川最上流部の折居国有林内に所在する前期古墳であり、狭長な竪穴式石室内より鏡・玉・鉄器等が見つかった。久津川古墳群内でも最も古い古墳の一つである。

金比羅山古墳は、庵寺山古墳の西方600m地点の丘陵上に築造された直径52mの円墳で、粘土槨内より舶載二神二獣鏡を始め、玉類・武器・鉄製農具が出土している。庵寺山古墳とはほぼ同時期の古墳と思われる。

坊主山古墳群は、金比羅山古墳に北接するもので、全長45mの前方後円墳の1号墳と直径25mの円墳である2号墳が調査されている。ともに後期前半のもので、須恵器・玉類・武器等が出土している。

伊勢田塚古墳は、庵寺山古墳の北西900m地点に存在したもので、四柱式陶棺が出土している。

以上のような、その内容が明らかな古墳以外にも過去に出土した遺物より古墳の存在が推測できるものが少なからずある。庵寺山古墳の北側丘陵上には、埴輪列より円墳の存在が知られる一里山古墳や、前期に比定できる埴輪の出土より前期古墳の存在が類推できる一里山東1号墳(右図1~11)、須恵器の一括出土や石材の存在した伝承より後期古墳の存在が知られる一里山東2号墳(右図12~18)などがあり、なお、未確認の古墳が付近に存在している可能性が高い。また、庵寺山古墳の南側丘陵上では、完形の須恵器がかつて採集されており、ここにも古墳が存在した可能性が指摘できる。



第5図 付近出土遺物

(註2・3より転載)

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要

3. 過去の調査

庵寺山古墳については、本年度の調査までに数回の調査が実施されているため、これらの成果について、ここで概観しておきたい。

A. 京都大学の埴輪調査

太平洋戦争も末期の昭和19年に、京都大学考古学研究室により埴輪の調査が実施されている。この調査がおそらく本墳最初の調査と思われる。調査の詳細な内容については公表されていないので知りえないが、墳頂部において埴輪の露出が認められたため、これらの埴輪を中心に調査が行なわれたらしい。この調査において、第6図に示した大型の蓋形埴輪^{きぬがさ}や靱形埴輪^{ゆぎ}を始め、小型の蓋形埴輪・家形埴輪・甲冑形埴輪・鱗付円筒埴輪片が約200点程収集され、現在は京都大学文学部博物館に収蔵^{註4}されている。

図示した蓋形埴輪は、高さ90cm程を測るもので、ほぼ完形に近い。傘部には、肋木の表現がなされ、その端部は大きく反り返る特徴をもつ。立ち飾りの表面にはヘラ描文様が施されている。蓋形埴輪の中で古式でかつ優美な代表例として著名な個体である。

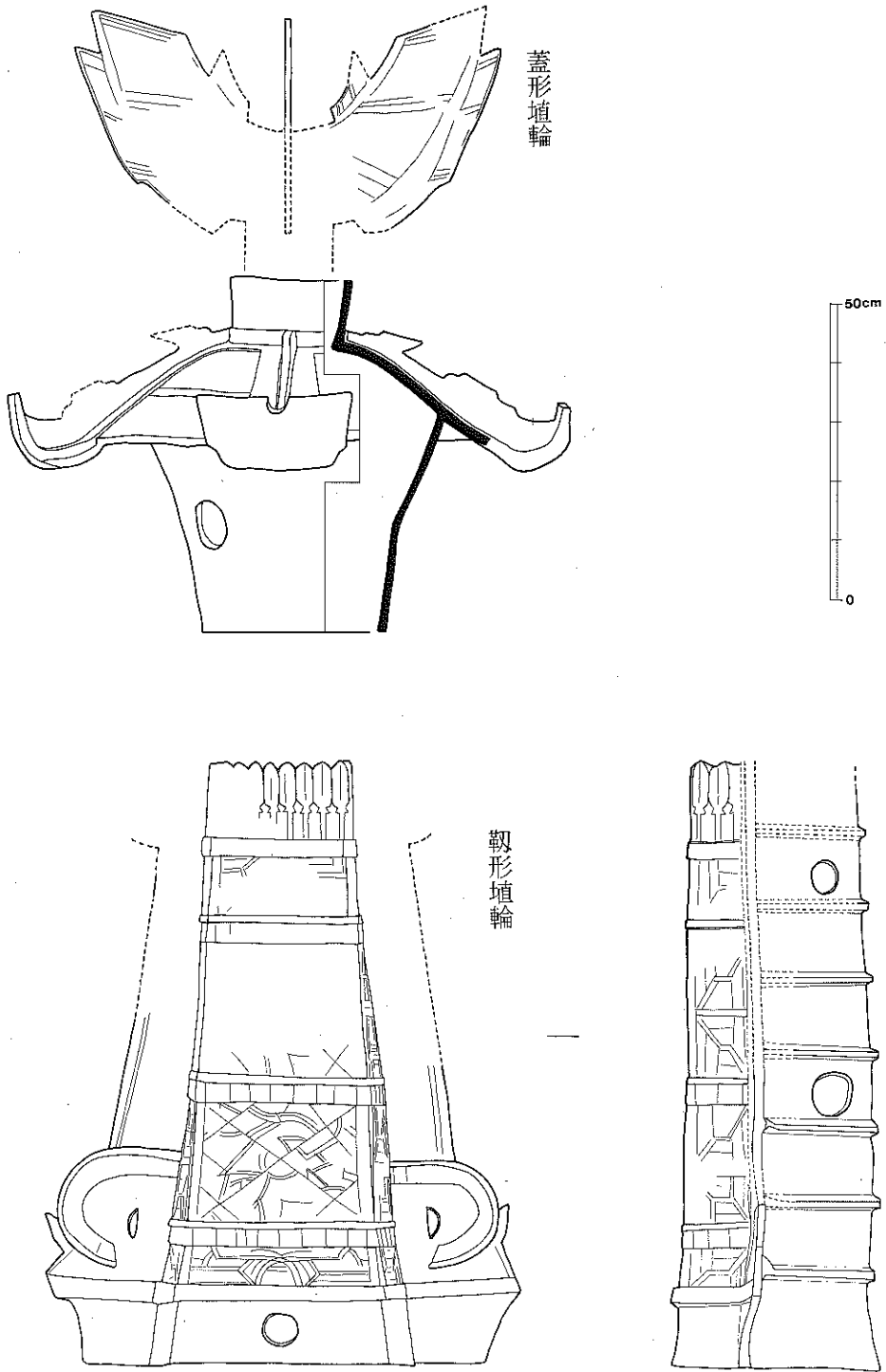
靱形埴輪も蓋形埴輪同様に現存高110cm程の大型品である。背板上半は欠失しているが、本来は奈良県宮山古墳例のように矢筒部を超え、上方に大きく広がる形式のものと思われる。矢筒部は上に向かってやや細くなる長方形状のもので、上端に矢じりが表現されている。矢筒部表面には直弧文が多用されている。背後の支えである半截された円筒埴輪は、現状で8段であり、表面にタテハケが認められる。

最近、器財埴輪の分類と編年案を発表した高橋壽氏^{註5}によれば、前者は蓋形埴輪一類二式に後者は靱形埴輪一類一式に分類され、古墳時代前期末から中期初頭に比定されている。

B. 城南高等学校による測量調査

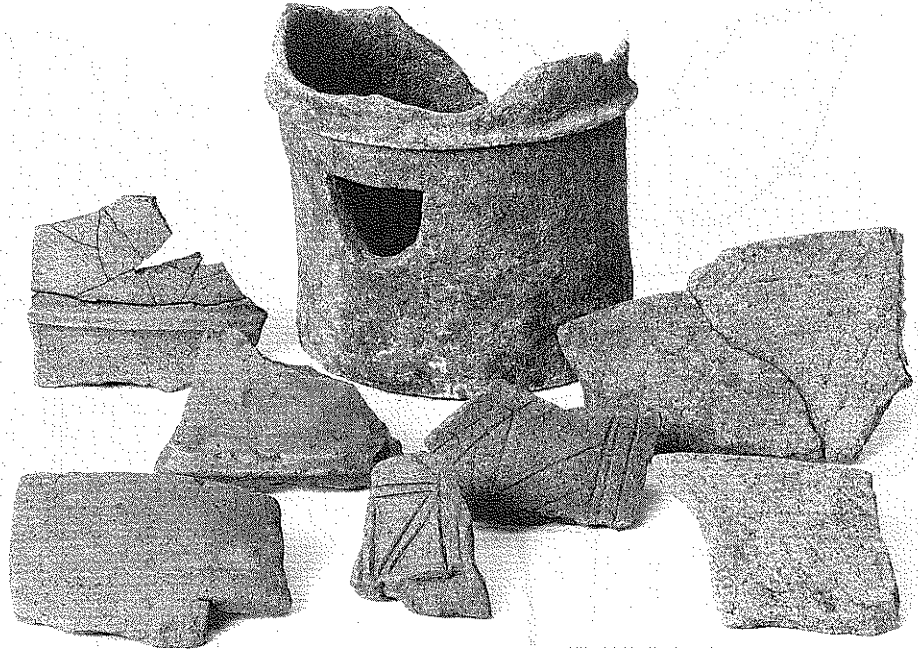
昭和48年に、京都府立城南高等学校地歴部により本墳の測量調査^{註6}が実施されている。測量時の古墳の状況は、墳丘及びその周辺は竹林となっており、墳丘西辺は大きく削り取られ崖となっていた。崖の北寄り下には、江戸中期の墓があるため、墳丘土取りはかなり以前から始まっていたようであり、最近に至っても、墓を避けた南寄りで壁土用の土取りが行なわれていたという。

測量調査の所見では、一辺約40mの方形墓壇上に築造された直径26mの円墳であり、墳丘の東及び南側に幅15m程の空濠をもつとされたが、これは後の発掘調査において訂正されることとなった。測量所見の当否は別として、開発前の庵寺山古墳の姿を記録したものと^{註6}してこの測量調査は大変意義深いものである。



第6図 昭和19年出土の形象埴輪実測図(註5より転載)

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要



第7図 昭和50年出土の埴輪

C、開発に伴う墳丘裾部の発掘

昭和50年、付近の宅地造成に伴い、庵寺山古墳も墳丘裾部が削り取られることとなったため、宇治市教育委員会では、「庵寺山古墳間隙発掘調査会」を臨時に組織し、古墳周囲の発掘調査を実施することとなった。^{註7}

発掘調査の結果、直径26m程と見られていた墳丘は、全体の一部にすぎず、かつての墳丘裾部が埋没していたことが判明した。この結果にもとづいて墳丘直径を復元すると56mとなり、京都府南部における最大級の円墳である可能性が高まった。墳丘の南半部には、幅9～11m、深さ1m程の周濠がめぐり、墳丘斜面には拳大の葺石や埴輪が散乱していた。また、墳丘の大半が盛土により築造されていることも理解された。

この調査において出土した遺物は、埴輪や近世陶器・瓦片がある。埴輪には、鱗付円筒埴輪や朝顔形埴輪を始め蓋形埴輪等の器財埴輪が認められる。近世陶器については、墳丘裾部で検出された近世墓内より出土したものと表採されたものの2者があるが、ともに近世末まで付近に存在した熊耳庵に関係するものと思われる。第7図に示した埴輪は、この調査において出土した円筒埴輪(鱗付?)及び蓋形埴輪の一部である。

これらの出土品については、現在、京都府立城南高等学校において一括で保管・管理されている。

4. 調査の経過

現地調査は、平成元年7月24日より開始した。まずは、現地での発掘に先立ち、計画準備として、現地調査事務所の設営及び測量基準点の設置より開始した。現地事務所としては、古墳内にその設営が無理であったため、地元町内会である広野丸山町内会のご理解を賜り、広野丸山集会所を調査事務所にあてた。測量基準点設置については、基準高を市立大久保小学校内に設置してある宇治市公共点No25(41.825)を既知点とし、墳頂部に測量用基準点として5点のコンクリート杭を埋設した。

掘削にあたっては、まず墳頂部の竹の伐採より開始した。墳丘には竹及び雑木が密集していたため、調査の防げとなるものを中心に伐採し、伐採した竹は排土用の土留め材として利用した。

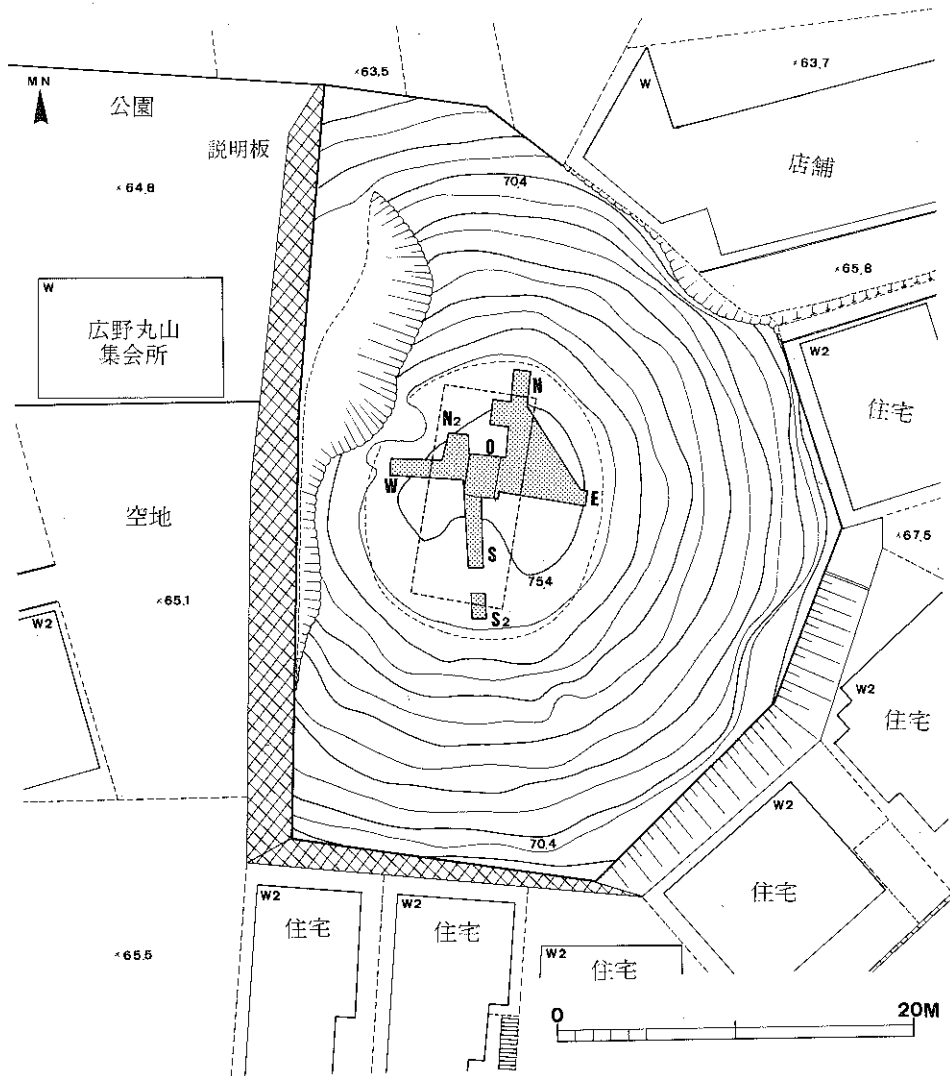
トレンチの設定は、今回の予備調査の目的が主に主体部の位置とその構造の確認にあるため、概ね東西南北方に向う十字トレンチとし、その中心点は盗掘墳とした。トレンチ名称は、それぞれE・W・S・Nトレンチとし、盗掘墳をOトレンチとした。

E・W・S・N各トレンチは幅1m、長さ3～5m程で、人力で伐根と併行して表土の排除を行なった。Nトレンチの途中で表土直下に原位置を保つ埴輪列を3本分を検出したため、トレンチを西方に一部拡張するとともにNトレンチとEトレンチとを結び面的に埴輪を追究した。この結果、埴輪列はNトレンチで南北にならんだ北端の埴輪を角として西に曲ることが確認できたため、Eトレンチ西端より北へN2トレンチを設定し埴輪列の検出を試みたが、原位置を保つものはなかった。E・Wトレンチより南側の墳丘部はすでに削平されており、レベル的にも原位置の埴輪検出は無理と判断された。この作業の中で、N・E・Wトレンチにおいて、墓壇掘方ラインを検出した。掘方ラインは概ね各トレンチに直行するように検出できたため、概ね北を向く長方形プランと判断でき、Sトレンチにおいて南端ラインの検出に努めたが発見できず、さらに南方にS2トレンチを設定し検出することができた。

Oトレンチは、調査前より開いていた盗掘墳を2m四方に掘り広げトレンチとしたものである。盗掘墳はほぼ同一場所で幾度となく掘削と埋め戻しが行なわれていたようで、結果としてOトレンチそのものは、盗掘墳の掘りなおしとなった。盗掘墳底には粘土が広く遺存し、本主体部が粘土礫であることを示していた。また盗掘墳の埋め戻し土内には多量の埴輪が混じっており、埋め戻しにさいして表面に散乱していた埴輪片が投入されている事が理解された。

このように、一応墓壇の平面形・範囲が確認でき、Oトレンチでの作業が終了に近づいた

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要



第8図 トレンチ配置図

時点で、E・Wトレンチにおいて土層確認のための掘り下げを南壁ぞいに行ない掘削作業を完了した。その後、写真撮影及び図化作業を行ない、調査記録を作成した。墳丘の測量については、都合により未了となったため、本報告に使用する地形図は、昭和48年城南高等学校測量図及び宇治市都市計画地形図・昭和50年開発計画図等より調整作図している。

埋め戻しにさいしては、主要部に土のう袋を充填し土砂により埋め戻しをした。これらすべての現地作業が完了したのは、10月3日であり、総発掘面積は40m²程である。

なお、本調査によって出土した遺物及び調査記録については、宇治市教育委員会が保管している。

5. 遺 構

今回の調査は、予備調査でもあり、必ずしも各遺構の全容が明らかにはなっていないが、調査において知り得た事を中心に説明をすることとしたい。

A、盛土の状況

本墳がほとんど盛土によって築造されている可能性については、昭和50年の調査によってすでに指摘されているところである。今回の調査は、墳頂部のみにおいて実施しているため、この部分の盛土状況について説明を加えたい。

墳頂部の土層の平面状況は、大きく二つに分けられる。一つは赤褐色系の墓壇埋土であり、もう一つは淡黄色の砂質系の墳丘盛土である。後者は粒の荒い砂と呼んだ方が良いもので、墳頂の北半部に広く認められる。墓壇は、この砂質土を穿っている。砂質系盛土の厚さは、深い所では1 m以上に及び、その下層に良質の赤褐色土が認められる。墓壇の一部は、この赤褐色土をも穿っている。墓壇の東側、Eトレンチの土層断ち割りにおいては、赤褐色土が東西幅2 m程でかまぼこ形に盛り上っている所があり注意を引いた。この赤褐色土は、基本的には砂質系盛土の下層に広く存在する盛土であろうと判断できるが、詳細な状況については、その検出範囲が余りにも狭いため、不明といわざるを得ない。なお、盛土内よりの出土遺物は認められなかった。

B、主体部の状況

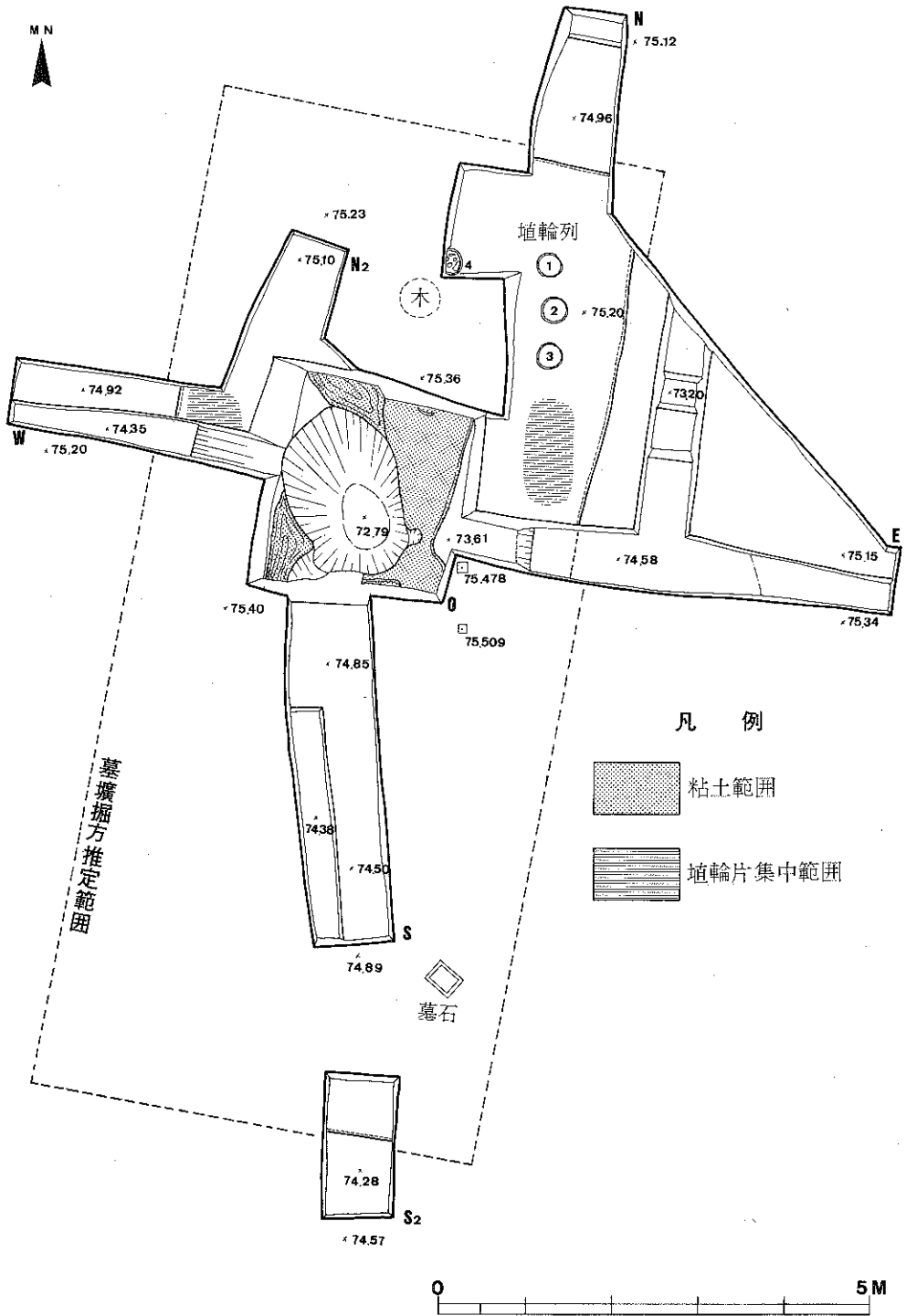
主体部、すなわち本墳の埋葬施設については、墳頂部のほぼ中央部において一基を確認した。状況的に中心主体部と見て間違いないものである。

墓壇掘方については、前述したとおり淡黄色砂質土を穿ったもので、Nトレンチでその北辺を、Eトレンチで東辺を、Wトレンチで西辺を、そしてS2トレンチで南辺のそれぞれ一部を検出した。これにより復元できる墓壇掘方の規模は、東西5.2m、南北11.7mであり、長方形の大型墓壇掘方が墳頂中央部に存在していることとなる。墓壇の主軸は、11°程磁北に対して東へ振れている。墓壇埋土は赤褐色系土であり、基本的には単層である。

墓壇掘方の断面形状は、EからWトレンチにおいて概ね確認している。この部分から見れば、墓壇はやや斜めに掘り込まれ、東辺側では2段墓壇状になる可能性が指摘できる。墓壇底は現地表下約2 mの所にあり、墓壇底の幅は約3 m程と思われる。

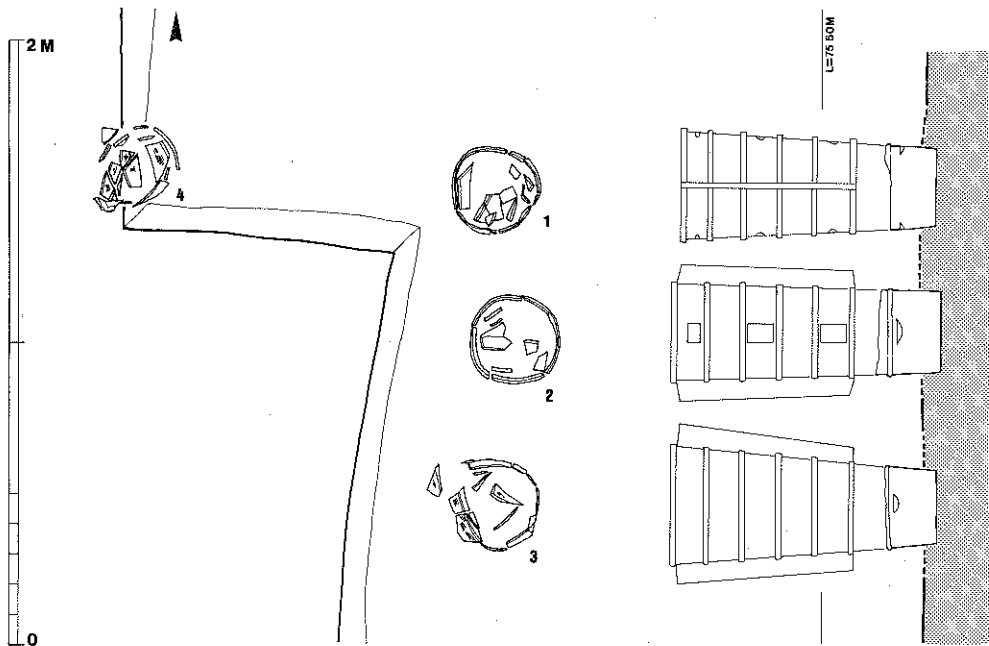
墓壇底中央部のやや西寄りに粘土槨が構築されている。但し、粘土槨を確認したのは、盗掘を掘りなおしたOトレンチのみであるため、その全容は判明していない。すでに述べたとおり、Oトレンチが盗掘範囲内であるため、ここでは旧状を保つ部分はなく、灰白色系

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要



第9図 遺構平面図

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要



第11図 墳頂部埴輪列実測図

鱗付円筒埴輪1から3の中心間距離はそれぞれ60cmを測り、1と4の距離は120cmを測る。1と4の間には、ちょうどもう1本分の埴輪が入る余地があるが、この部分には埴輪が抜き取られたような状況が認められないため、当初より埴輪が立てられていなかったと思われる。埴輪基部の埋設方法については、墓壇掘方内での埴輪樹立のため、土色判別が難しく確認できなかった。

鱗付円筒埴輪1から4のそれぞれの鱗の向きについては、2と3が南北方向に、1と4が東西方向に付くことが後の埴輪復元作業において確認できた。このような状況と埴輪の平面的な配置の有様から、この埴輪列は、主体部上を方形に囲むもので、今回検出した部分は、その北東コーナー部と判断できる。鱗付円筒埴輪3の南側及びWトレンチ東側部において、基部を含む鱗付円筒埴輪片が比較的集中する所が認められたが、これらも原位置は保たないものの、方形埴輪列を構成していた個体の一部と思われる。この墳頂部の方形埴輪列は、方向的にはほぼ磁北を基に設置されており、墓壇掘形とやや方位を異にする点が注意を引く。また、第11図において、鱗付円筒埴輪1から3の検出状況にそれぞれの個体の実測図をスケールダウンして重ね合わせたところ、2と3の鱗は十数cmの間隔があくことが理解できた。

また、墳頂部平坦面外周については、今回の調査では埴輪列の存在の可能性は低いように思えた。

6. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、埴輪がほとんどで、他に少量の鉄器・土師皿・須恵器・近世陶器片がある。出土量はコンテナバットで約25箱分である。

本報告においては、直接本古墳に関係する遺物である埴輪について論述することとし、他の遺物については、粘土礫上面に残された盗掘者の所有品を下図に掲げ、他は一切割愛することとしたい。

今回出土した埴輪は、前述したとおり大半が盗掘墳埋土内出土であり、原位置を保ち本来の樹立状況が確認できたのは、鱗付円筒埴輪4本にすぎない。種類は、(鱗付)円筒埴輪を中心に、家形埴輪・蓋形埴輪・甲冑形埴輪・朝顔形埴輪が確認できる。形象埴輪としては、家形埴輪の破片が多いのが注目できる。では、以下に種類ごとにその概要を報告する。

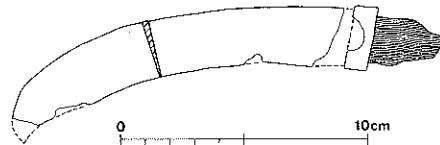
A、鱗付円筒埴輪

鱗付円筒埴輪とは、円筒埴輪の両側面に一對の細長い粘土板(鱗)を付したもので、円筒埴輪の一種である。ここでは、特に原位置を保って出土した個体を中心に観察を進めたい。

復元できた鱗付円筒埴輪は4の1個体のみであり、他の個体については、これをもとに机上復元をしている。

鱗付円筒埴輪は、いずれも底径22~25cm、口径36~42cm、器高90cm前後の比較的大型品で6本のタガにより7段に作られている。器高が高い割には、口径と底径の差が少ないため、上開きの感を与えない。各段ごとの間隔は、基部(第1段)が最も広く、第2段から第6段までは均等の幅で割り付けられ、口縁部(第7段)はやや狭く割り付けられている。器壁は1cm弱と概して薄作りであり、所々において、2~4cm幅の粘土紐痕跡を器壁断面で観察できる。また、器壁表面に黒斑を有す特色をもつ。

タガは、幅1.5cm程の細いものが多く、断面が台形状を呈する。タガ接合時のナデによって、タガの中央部が凹むものが目立つ。口縁部端も一見タガ状に見えるが、これは口縁端外側に粘土帯を貼り付け玉縁にしているためである。今回の出土品を見る限り、口縁部はすべてこの玉縁状のもので、その形状は、幅の狭い粘土帯を貼り付け、角がシャープに作られているものや、幅広の帯により角が丸味をもって作られるものなど、数種類が認められる。



第12図 盗掘墳出土の鎌

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要

透し孔は、基部・3段目・5段目・口縁部に各段一対穿孔される。通常の円筒埴輪の場合、透し孔は基部と口縁部を除く各段に一対ずつ互い違いに直行して穿孔されるのが通例であるのに対し、本例では基部と口縁部に透し孔を持つ特徴がある。また、2・4・6段目に直行する透し孔を持たないのは、その位置に鱗を付すため透し孔を穿つことが不可能であるからと判断できる。口縁部の透し孔については、今回出土例の中では、鱗付円筒埴輪1だけで確認したが、京都大学収蔵品の中には口縁部に方形の透し孔を持つ破片が数点含まれている。

透し孔の形状は、基本的には長方形のものと円形のもの認められるが、いずれの場合でも基部の透し孔は下弦の半円形透し孔となる。正確な数量計算はしていないが、長方形透し孔の方が優位である。

鱗は、幅6cm、厚さ1cm程を測り、口縁部から第2段タガまで付されている。但し口縁部での貼り付け位置を詳細に見ると、玉縁部の下端から始まるものと、玉縁の1.5cm程下から始まるものの2者が認められる。鱗の貼り付けに関しては、まず円筒表面にヘラで凹凸を付け、次にタガの高さまでまず粘土帯を貼り、そして鱗本体を付す工程が看取できる。鱗表面はナデ調整である。

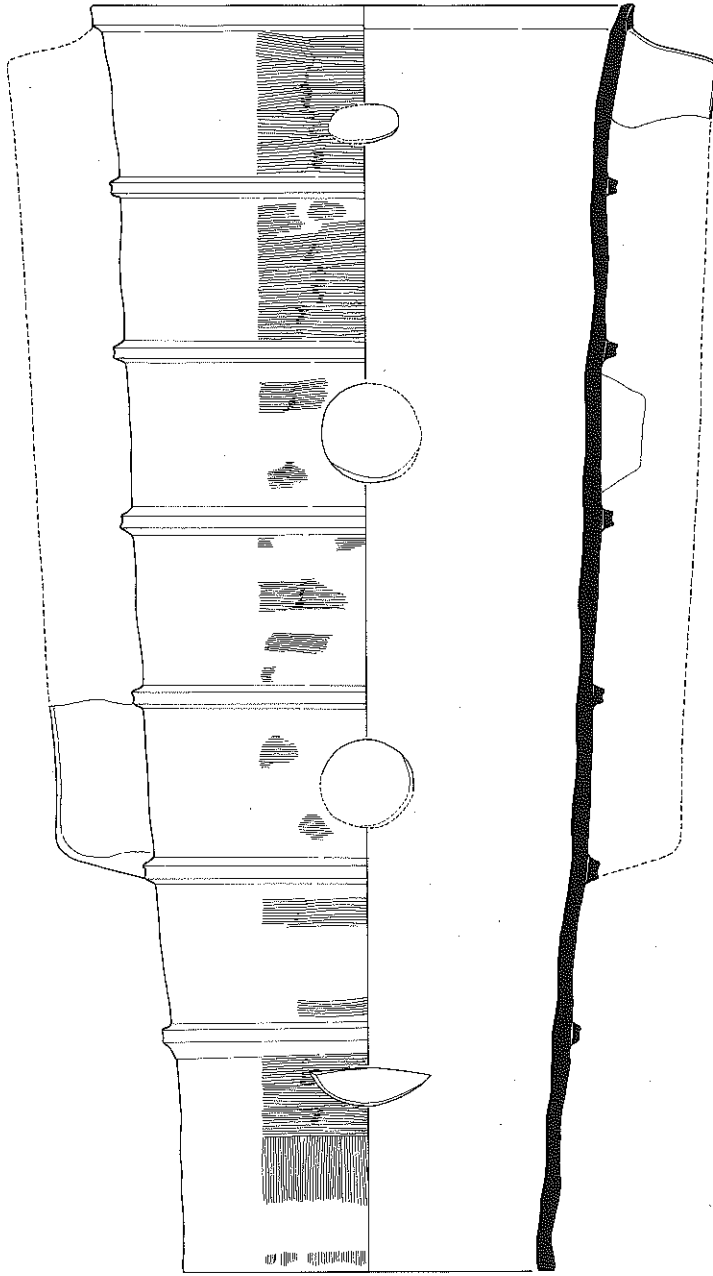
円筒部の調整は、外面は基本的には断続的なヨコハケである。但し、基部においては、上半のみヨコハケを施し、下半に一次調整のタテハケが残るものが認められる。口縁部も大半がヨコハケであるが、数点において、全く2次調整のヨコハケを施さないため、1次調整のタテハケのみとなっているものが認められる。

内面調整は、基本的にはナデ調整であり、かなり平滑に仕上げられている。個体によっては、特に上半部に消し残されたハケ痕跡を有すものがある。

復元不可能な大部分の破片についても、その状況は上述のとおりであるが、これらとは違う調整をもつ個体が数点あるので簡略に記しておく。第17図11は、円筒埴輪の中程の破片であるが、表面調整はタテハケのみである。同図10は、表面に極細のヨコハケが施され、タガが異常に高い。前者は、京都大学蔵の靱形埴輪の支え円筒の調整がタテハケのみであるところから、形象埴輪に使用された円筒部の可能性が考えられる。後者についても、同様であろう。鱗付か普通円筒埴輪かを判断するのは、破片の場合、かなり難しい。しかし、今回の出土品を概観する中では、鱗部片が比較的良く目につくため、破片の大半も鱗付円筒埴輪の可能性を考えている。

B. 朝顔形埴輪

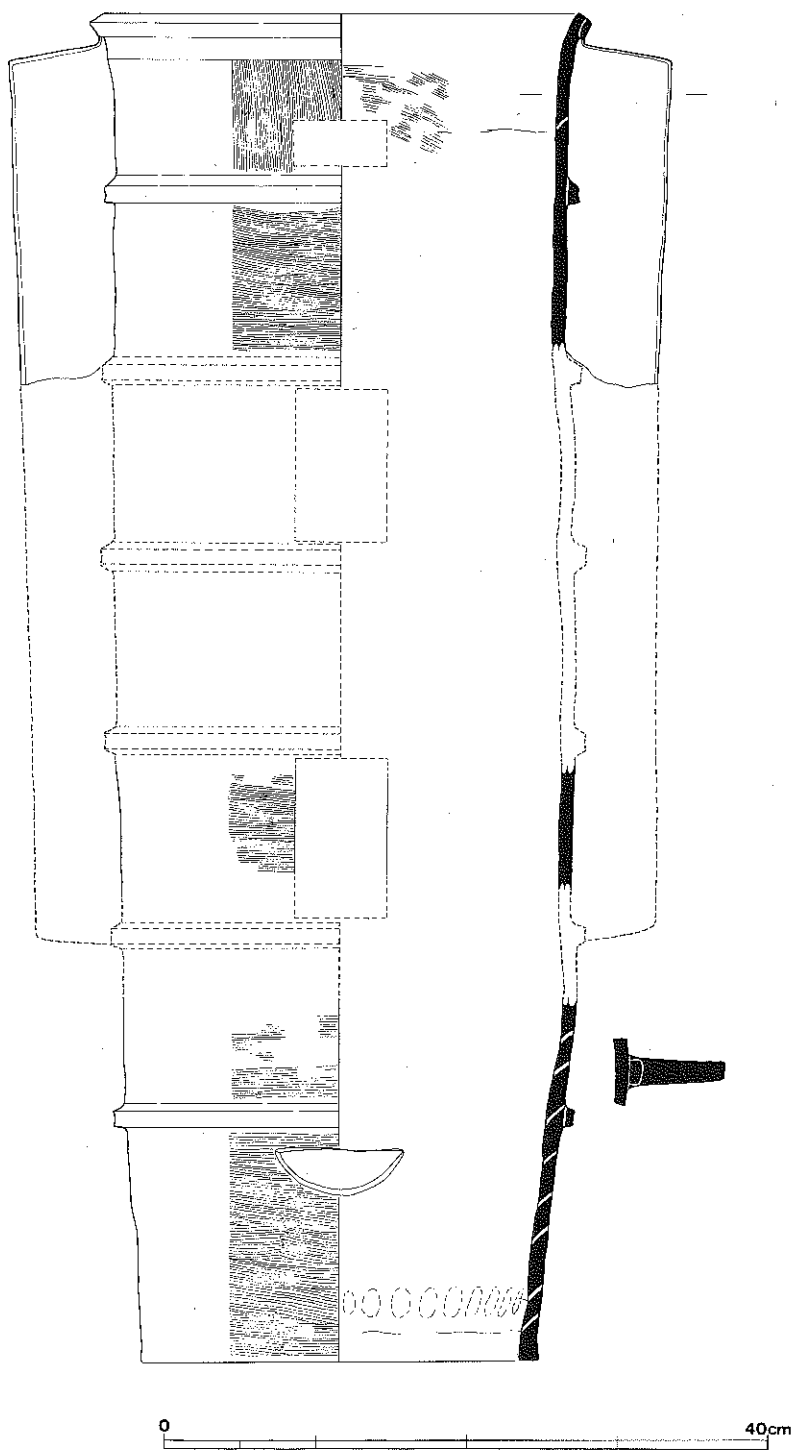
朝顔形埴輪については、口縁部が数点出土している。口縁部は大きく外反する二重口縁を呈すもので、頸部は細く、そこに一条の凸帯を付す。口縁部内・外面にはハケ調整を施している。



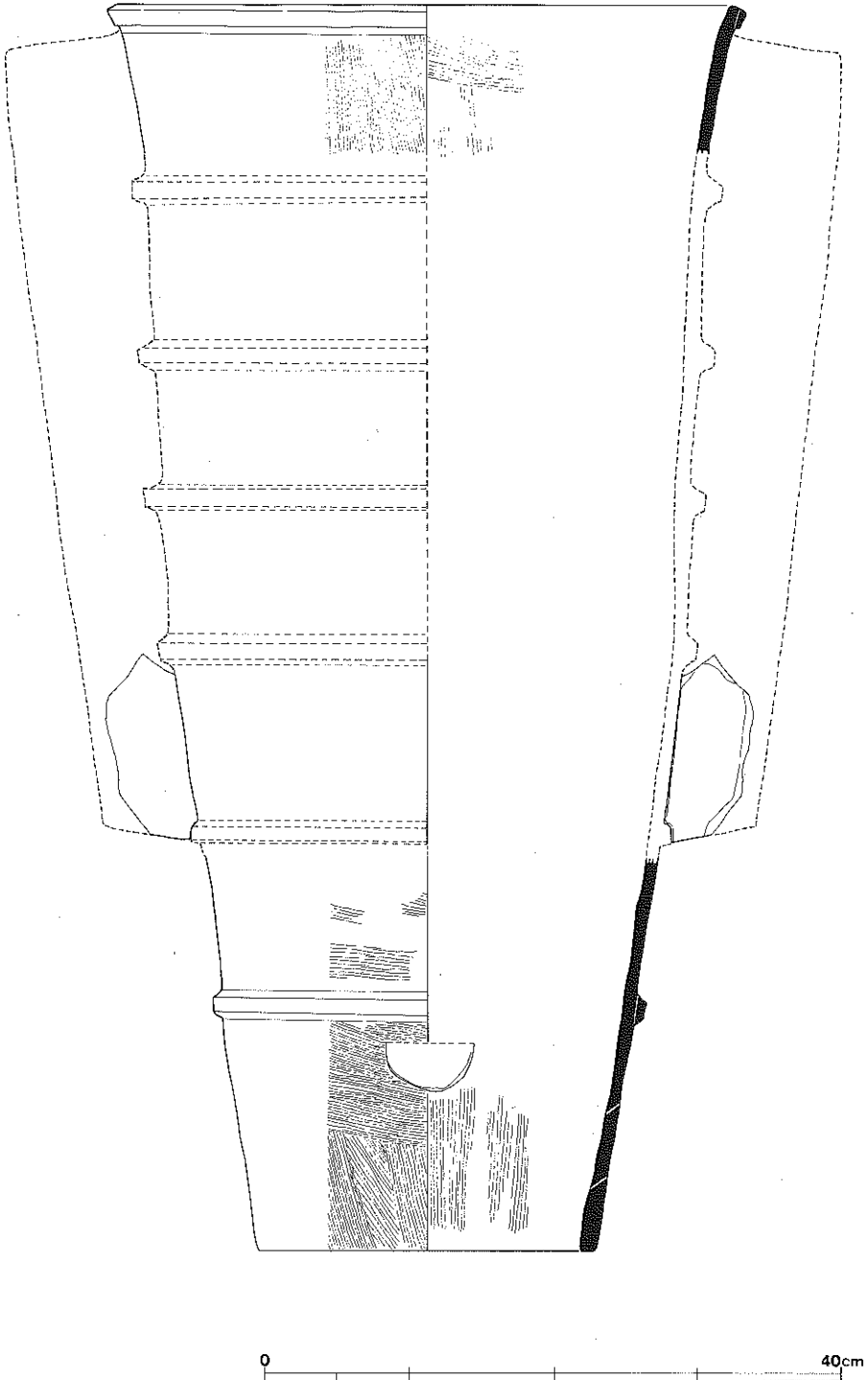
0 40cm

第13図 鱧付円筒埴輪1 実測図

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要

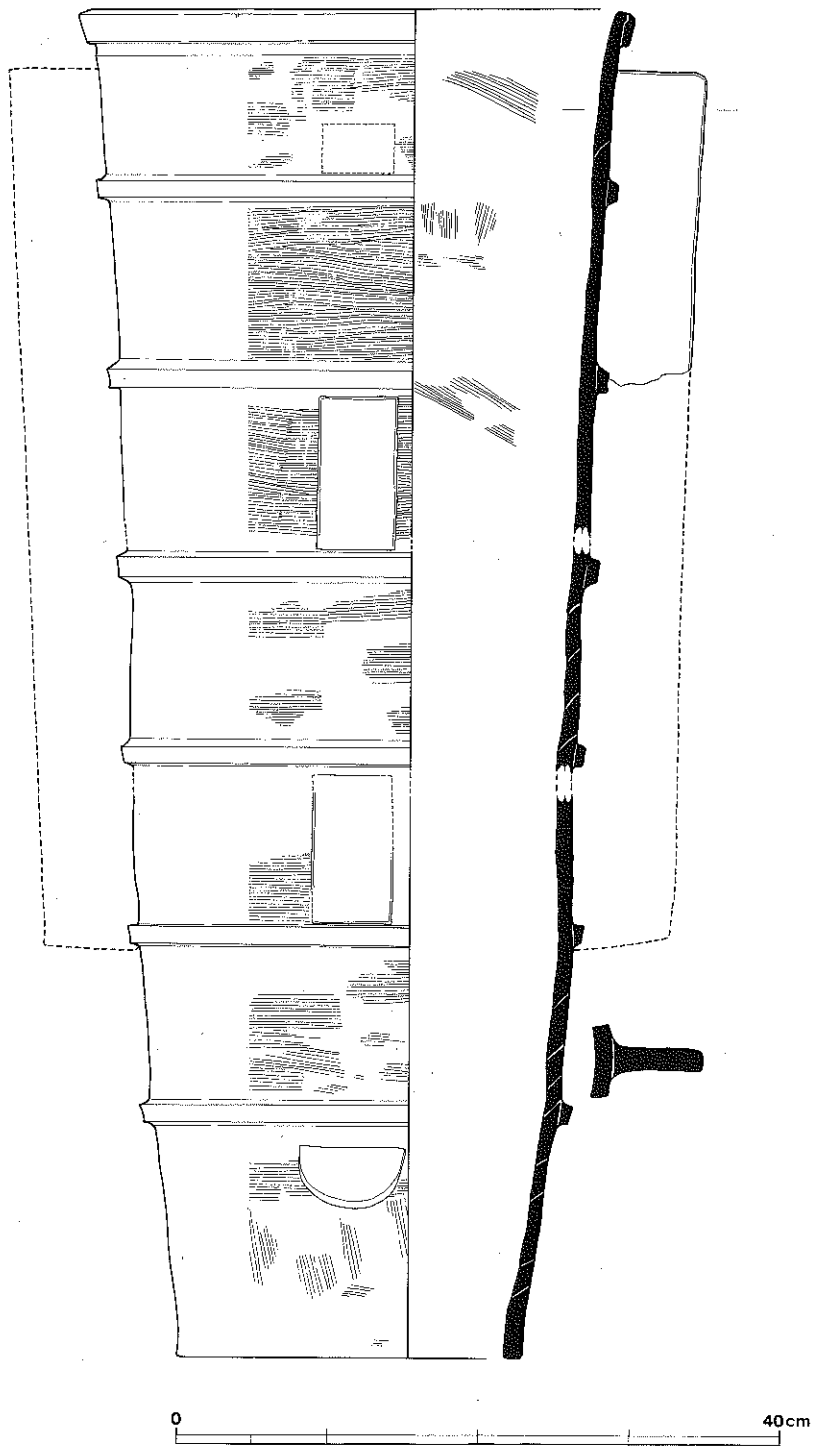


第14図 緒付円筒埴輪2 実測図

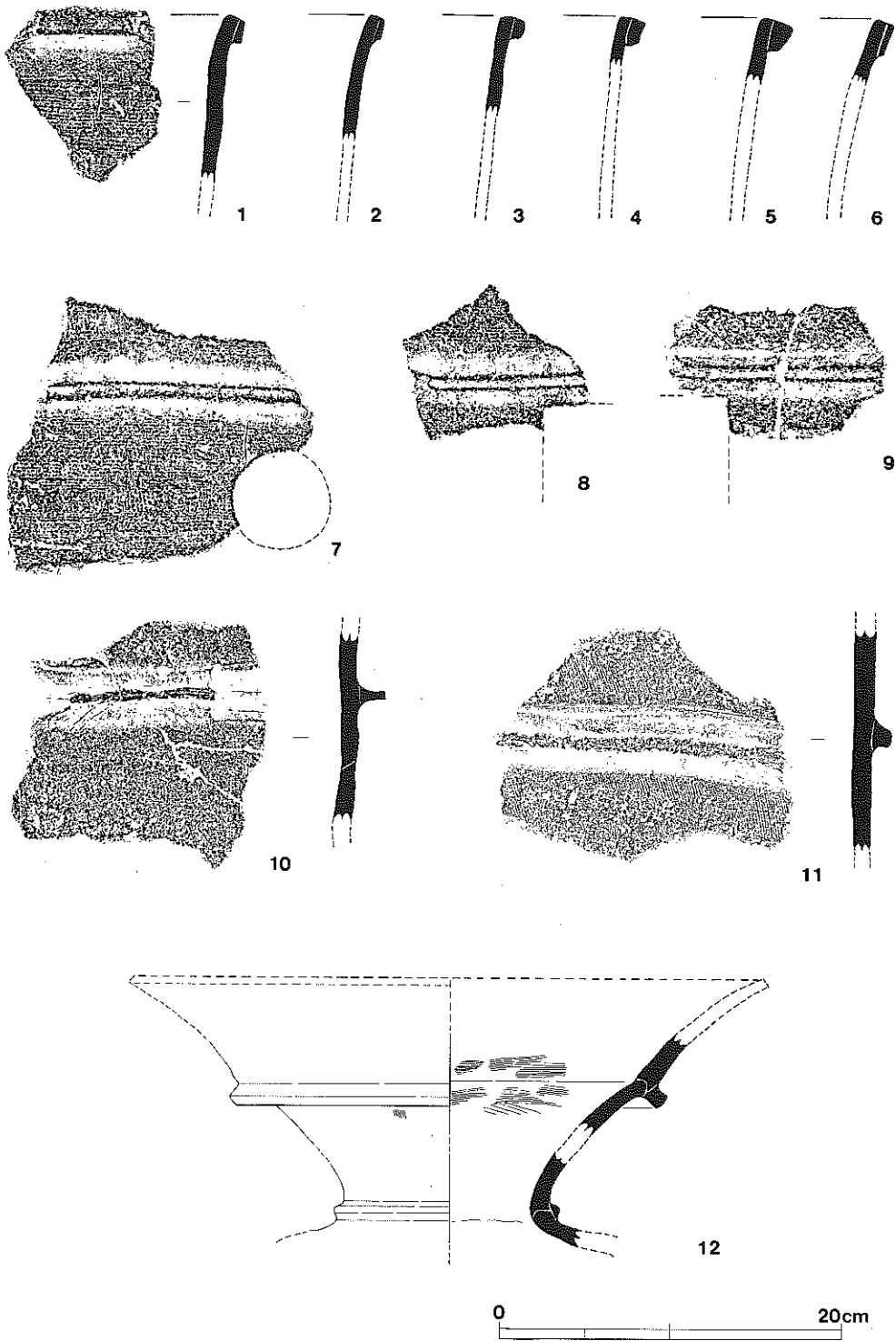


第15図 鑄付円筒埴輪3 実測図

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要



第16図 緒付円筒埴輪 4 実測図



第17图 凹筒埴輪片・朝顔形埴輪実測図

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要

C. 家形埴輪

今回出土した家形埴輪の破片数は約200片程あり、ここから5棟分の家形埴輪の様相を窺うことができた。しかし、残りの破片の中には、まだ2棟分以上と考えられる個体が想定でき、計7棟分以上の家形埴輪の破片が今回出土したことになる。

ここでは、その形態が概ね窺える5棟の概要を中心に報告することとしたい。

(家形埴輪1) 平側3間、妻側2間に表現された家形埴輪で、平行60cm、妻行43cmを測る大型品である。平側の2間には、上下に羽状文をへら描きした方形の区画が表現され、おそらく壁を表わしているものと思われる。妻側も1間は同様な方形の区画が表現され、もう1間はへら描き沈線に囲まれた入口になっている。平側・妻側とも下半には縁板状の幅5cm程の凸帯がめぐり、家本体と基部とを分けている。家本体表面は丁寧なハケ調整であるのに対し、基部はナデ調整となっている。基部平側は、おそらく2個の半円形の割り込みが、妻側は1個の半円形の割り込みが穿たれている。

屋根は寄棟と思われるが、棟部を欠失している。屋根の推定高は34cm程であり、全体の高さは58cm程に復元できる。軒には押縁が凸帯状に表現され、流れ上半にも横押縁が凸帯で表現されている。屋根表面はナデ調整により平滑に仕上げられている。

また、表面の所々に赤色顔料の痕跡が認められるため、かつては赤く塗られていたことが理解できる。

(家形埴輪2) 平側2間、妻側2間に表現され、平行33.8cm、妻行25.4cmを測る。平側及び妻側は、上端から下半をめぐる縁板状凸帯まで引かれたへら描き直線によって柱と壁の区別がなされている。平側の1間に長方形の入口が穿たれている以外、現状では窓等の表現は認められない。また基部にも割り込みは認められない。家本体表面はタテハケ調整であり、表面のところどころに赤色顔料が塗布された痕跡を残す。

屋根は寄棟であり、屋根を含めた推定高は35cm程である。流れ下端には押縁がへら描きで表現され、棟の端にも縦押縁と思われるへら描きが認められる。屋根の調整はハケ調整であり、家本体と比べるとやや荒いハケが使用されている。

(家形埴輪3) 平側1間、妻側1間に表現され、平行24cm、妻行20.6cmを測る。平側中央は大きく窓状に開いており、妻側も同様な状態になると思われる。柱には、左右両端部にそれぞれ1本の縦の線が引かれ、その間を2本一組の横線でつなぐへら描き文様が施されている。表面にはところどころにハケ調整痕跡を残す。下半には縁板状の凸帯がめぐり、平側基部中央には半円形の割り込みが穿たれている。

屋根は切妻であり、妻に破風板をもつ。基底から棟までの高さは30cmを測り、破風板分の高さを含めると33.5cmに推定できる。棟に近い部分に押縁と思われるへら描きが認められる。

(家形埴輪4) 平側2間、妻側2間と思われる家形埴輪である。平行41cm、妻行30.5cmに復元できる。平側は、縦のヘラ描きによって柱と壁とが区別され、壁部中央に方形の窓を穿っている。妻側にも縦のヘラ描きが一部看取でき、これにより柱と壁が平側と同様に区別されていたことが推測できるが、多くを欠失しているため詳細は不明である。下半には、「く」字形に外側へ開く袴形の凸帯がめぐる。基部の割り込みについては不明である。表面の調整はハケ調整である。

屋根は、切妻風の上屋根と寄棟風の下屋根からなる原始入母屋造りである。上屋根の妻側には破風板がつく。基底から破風板頂部までの推定高は50cmである。上屋根左右端には、ヘラ描きが認められ、縦押縁を表現しているものと思われる。また、上屋根と下屋根の平側接点にも2条の横方向のヘラ描きがあり、横押縁を表わしているものと思われる。下屋根の下端には1条の横方向のヘラ描きがあり、棟の押縁を表現している。屋根の調整は、ハケ調整の後ナデを行っており、所々にハケ痕跡が残る。

表面には部分的に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。

(家形埴輪5) 断片的な資料で、全形を復元することは不可能な個体である。状況的には、平側・妻側とも2間に表現される可能性が高く、今回出土した中では唯一の高床式の家形埴輪である。柱は、壁より一段高く表現されており、上階の壁部中央には平側・妻側とも方形の窓が穿たれているものと思われる。上階と下階とは、凸帯により区別されているが、凸帯はほとんど剥落しており、その形状は不明である。下階の壁部は、平側・妻側とも下半が方形に穿たれている。基部の形状は不明である。表面調整は、ハケ調整の後ナデを行っており、所々にハケ痕跡を残す。

屋根は、破片の観察から原始入母屋造りと判断できる。上屋根と下屋根の境目には、横押縁が低い凸帯で表現されている。また下屋根の棟部分にも押縁が凸帯状に表現されている。

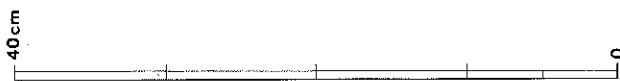
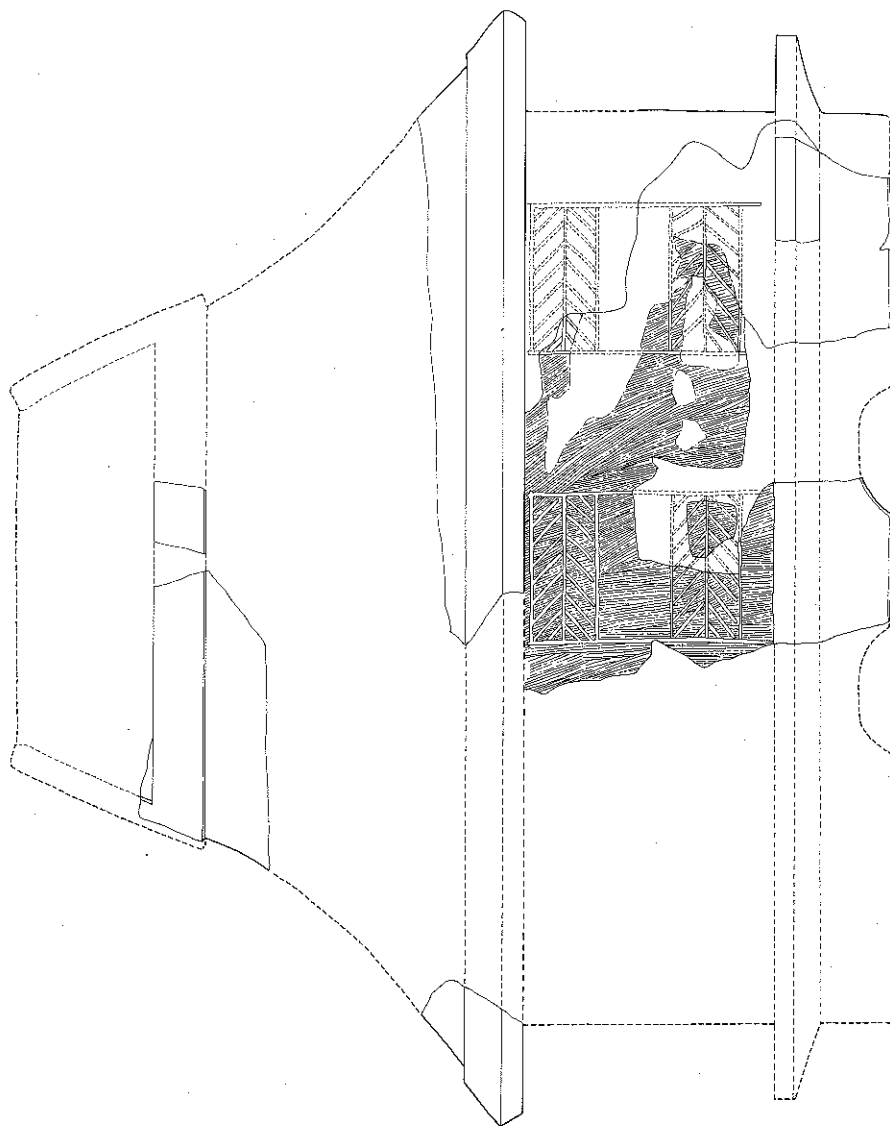
表面には部分的に赤色顔料を塗布した痕跡が残る。

(その他の家形埴輪) 以上5個体分の家形埴輪以外にも、他個体の破片がコンテナ箱で1箱分ある。いずれも小片であり、個体同定はもちろん、部分認定も困難なものが多い。図版第16には、この中でも比較的部分が理解し易い破片を示した。

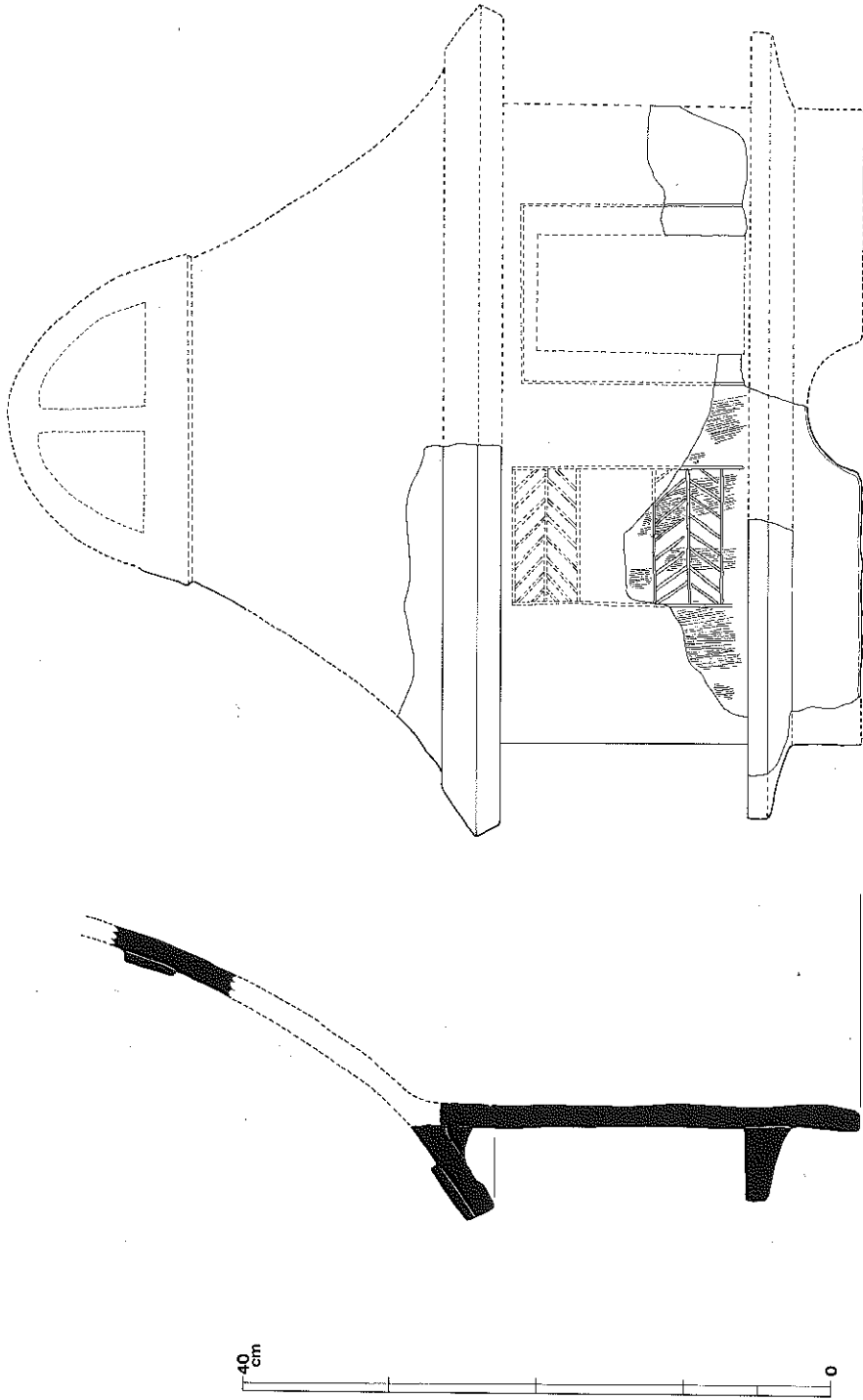
これらを全体的に見まわすと、基部片、柱片、切妻屋根片、入母屋屋根の横押縁部などが認められ、法量及び胎土から、さらに2個以上の家形埴輪が含まれていることが理解できる。

以上のように、今回出土した家形埴輪は、各種類のものが多数出土しているところに特徴があり、出土場所がほとんど盗掘墳内であったことを考えあわせると、かつて墓墳上に樹立されていた家形埴輪の様相をほぼ示していると推測できよう。

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要

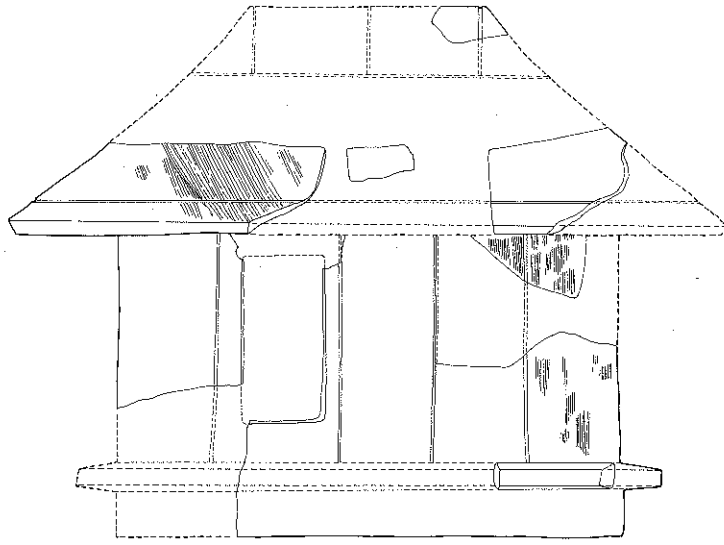


第18図 家形埴輪1実測図(正面)

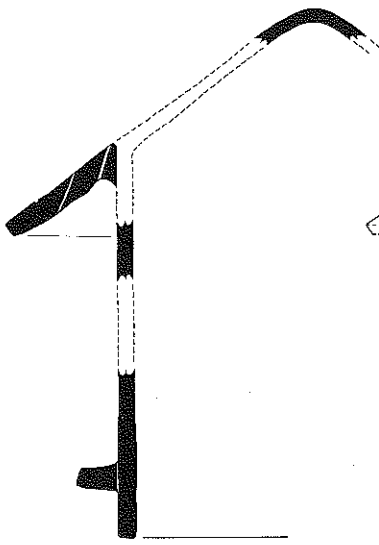


第19図 家形埴輪1 実測図(左側面・断面)

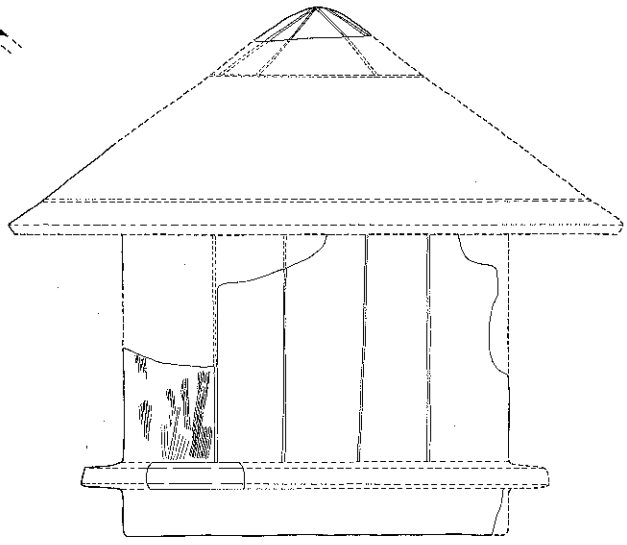
I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要



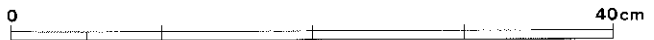
正面



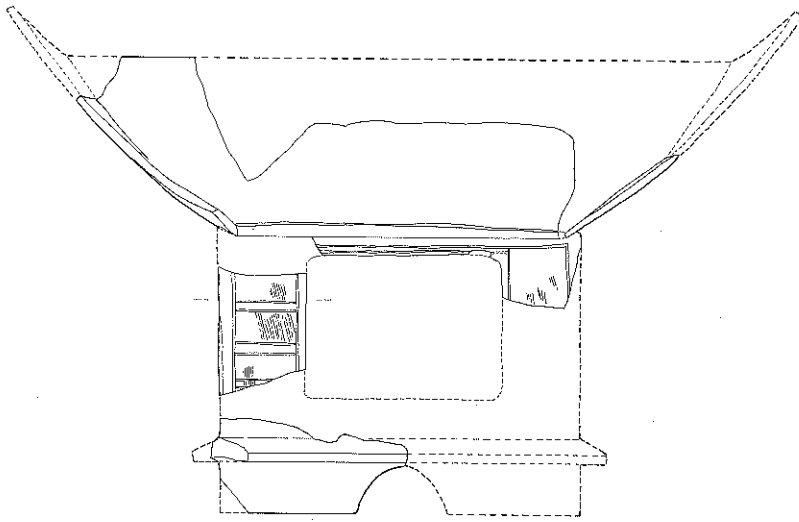
断面



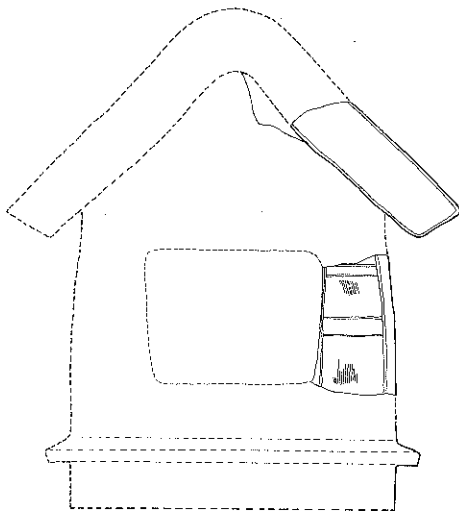
左側面



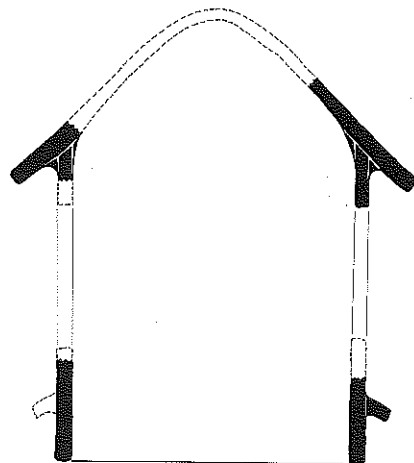
第20図 家形埴輪2 実測図



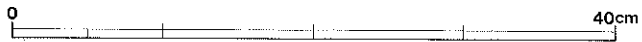
正 面



左側面

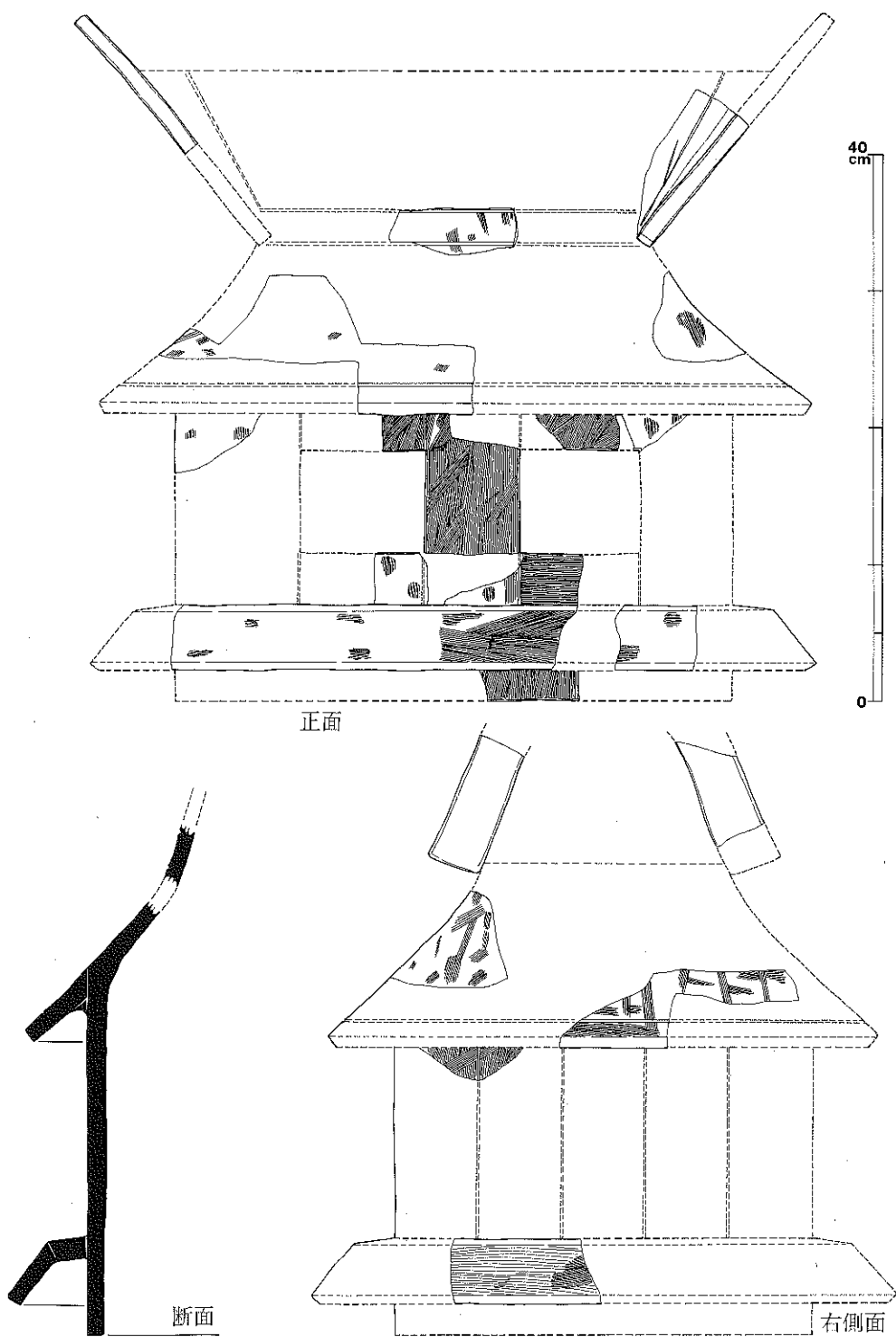


断 面

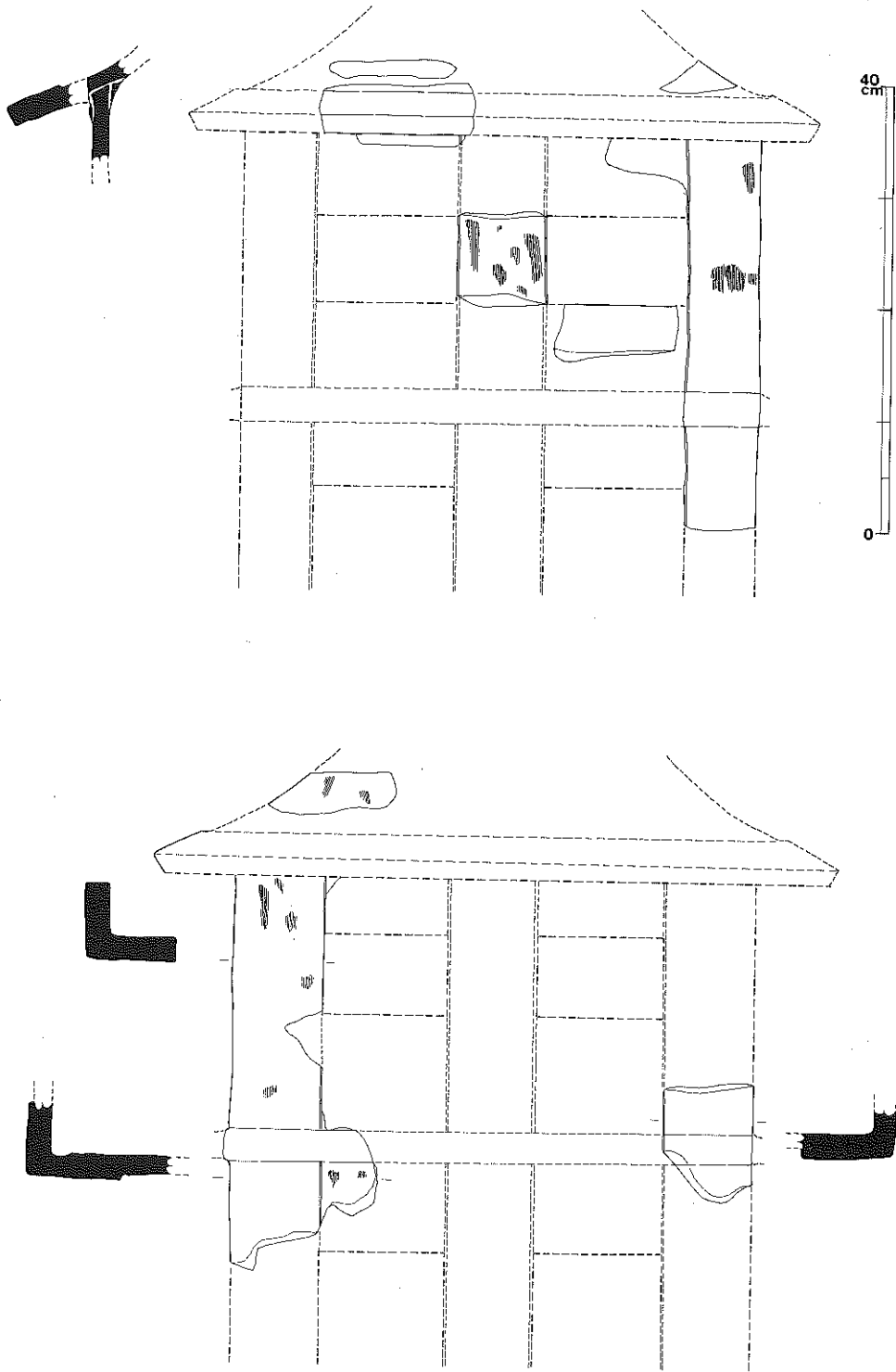


第21図 家形埴輪 3 実測図

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要



第22図 家形埴輪 4 実測図



第23図 家形埴輪5実測図

I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要

D. 蓋形埴輪

今回出土した蓋形埴輪片数は約50点であり、形象埴輪としては家形埴輪に次いで多い。

蓋形埴輪には、破片接合により復元可能な個体はなく、破片よりその状況を観察した結果、次の2種類に大きく分けることができる。

(蓋形埴輪A) 傘部直径64cm程、器高90cm以上に復元できる大型品で、昭和19年に出土し現在京都大学文学部博物館に展示されているものと同様な形態のものである。

傘部には四方に肋木の表現がされ、その端部は大きく反り返る特徴をもつ。肋木は、薄い粘土板を傘部に貼り付けることにより、傘部より一段高く作り出されており、その中央に鱗状の飾り板がつく。傘部は、中央付近に2条のへら描き沈線がめぐる以外は基本的に無文である。但し、この大型の蓋形埴輪の傘部片の中で第14図1だけには、後述する蓋形埴輪Bと同様に傘部下半に方形のひだを表現したと見られるへら描きが施されている。

傘部上に装着される立ち飾りは、「U」字形板を直行させ、4枚羽根としたもので、羽根の内側及び外側にそれぞれ1個所の鱗がつく。この鱗の形状には2種類が認められる。1種類は京都大学文学部博物館展示品と同様に単純な方形の鱗が付くもの(第14図6・7)で、立ち飾りⅠ類とする。もう1種類は、鱗が浅く半円形状に2～3度斜り込まれたもの(第14図4・5)であり、これを立ち飾りⅡ類とする。Ⅰ・Ⅱ類とも表面に2条のへら描きによる枠取りと、それを結ぶ3条のへら描き直線を主とする文様が施されている。

蓋形埴輪Aは、胎土等の観察から3個体分が確認できる。いずれも盗掘坑内より出土している。

(蓋形埴輪B) 傘部直径が45cm程に復元できる小型の蓋形埴輪で、傘部片が5～6個体分出土した。蓋形埴輪Aと違い肋木の造形をもたない。傘部下半は、2段の方形のひだを表現したと見られるへら描きを施すが、破片を詳細に観察するとこのへら描きは下記のa～cの3種類に分けることができる。

aは、方形のひだ状表現の最上端を2条の横方向のへら描きで区画し、さらに傘部端との間に1条の直線を設けこの間を上下に2分し、上・下段に1条の縦方向のへら描きを施すもの(第14図9)である。

bは、上段の縦のへら描きが1条で、下段のへら描きが2条になるもの(第14図10)である。

cはbとは逆で、上段の縦のへら描きが2条で、下段のへら描きが1条のもの(第14図12)である。

今回の調査では、蓋形埴輪Bに伴うものと判断できる立ち飾りは出土していないが、京都大学が昭和19年に収集した資料の中に法量的にこれに伴う可能性がある立ち飾り片を見出すことができたので、その復元図^{註8}を第25図に示した。この立ち飾りは、蓋形埴輪Aの立ち飾

りと違い、羽根の外側に2個の長方形の鱗をもつ。表面の文様は、2条のヘラ描きによる粹取とそれを結ぶ2～3条のヘラ描き直線が基本であり、概ね蓋形埴輪Aの立ち飾りの文様に等しい。

蓋形埴輪Bの破片は、盗掘壕内及び鱗付円筒埴輪1～3内より出土しているため、埴頂部方形埴輪列中に使用されていた可能性が高い。

E、甲冑形埴輪

草摺^{くさずり}の断片が2片出土しており、同一個体と思われる。草摺の形状は、スカート状に単純に下開きになるもので、上端直径22cmを測る。下端部及び円筒形台部を欠失している。

表面には、縦方向に3～4条一組のヘラ描き直線が一定間隔で施され、横方向には、最上部に羽状文帯、その下に空白部と直線に囲まれた2条の鋸歯文帯を交互に配する。文様の構成から、本品は革製の草摺を模したものである。

甲冑形埴輪は、短甲や冑・草摺が一体的に造られるものと、それぞれが別々に作られ組み合わされるものの2者があり、本例は後者にあたるが、今回の調査では草摺のみの出土であるため、はたして本来は短甲等が組み合わされていたのか、草摺のみ単体で使用されていたのか、いずれとも決し難い。本品は盗掘壕よりの出土である。

F、埴輪小結

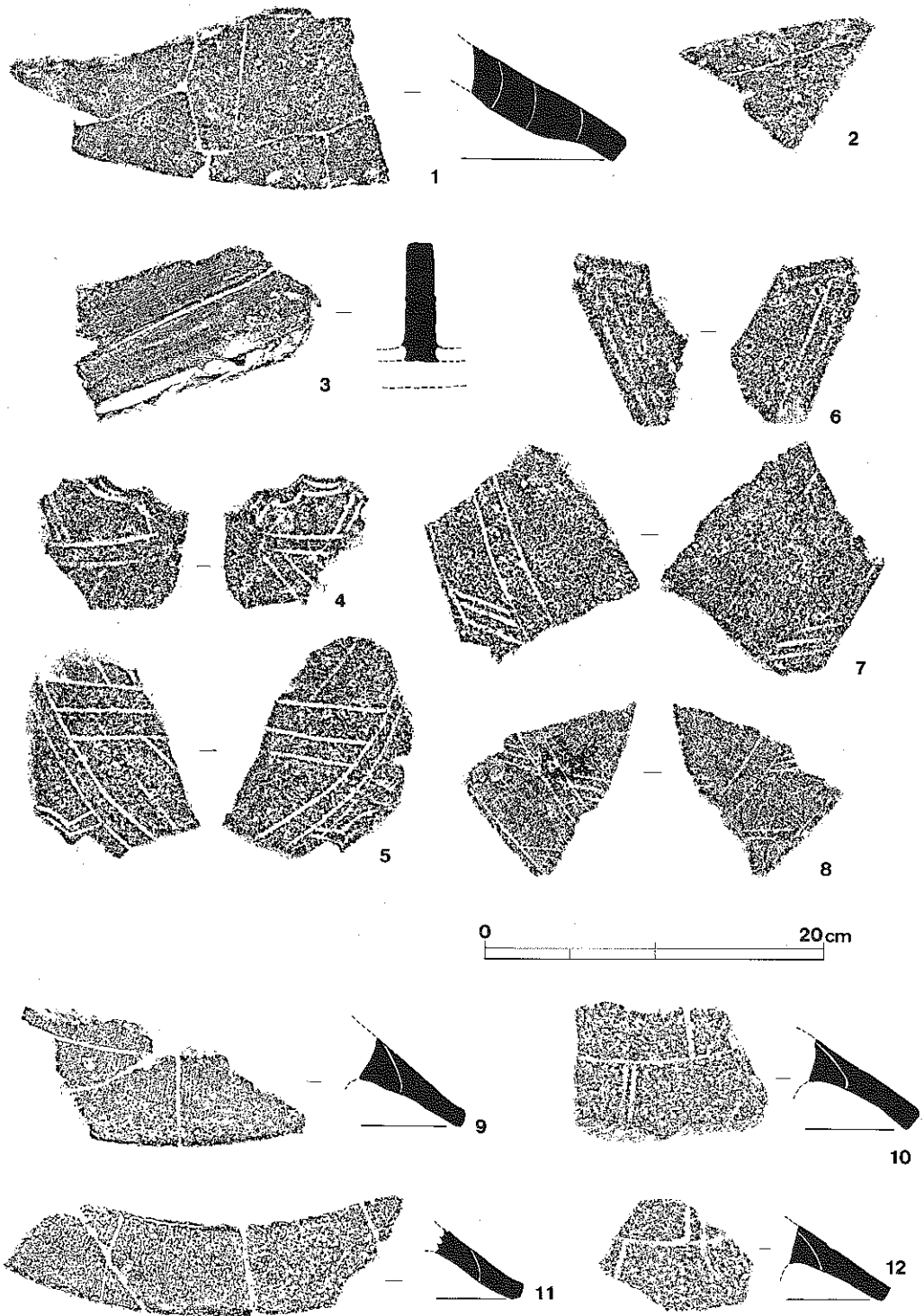
以上、今回出土した埴輪の概要を種類ごとに述べてきたが、ここで整理をし、埴輪のまとめとしたい。

調査面積が少ない割には埴輪出土量が多いのは、盗掘壕内に多量の埴輪が投棄されていた偶然によるもので、少ない労力で本墳の埴輪の様相が比較的明瞭となったのは不幸中の幸であった。この盗掘壕内の埴輪は、状況的には埴頂部に樹立されていたものの可能性が高いため、特に形象埴輪の有様については一定の理解ができる。以前に埴頂部から採集された埴輪を含めると、現在確認できる形象埴輪の種類は、家形埴輪・靱形埴輪・甲冑形埴輪・蓋形埴輪があり、量的には、家形埴輪と蓋形埴輪が目立って多い。また、蓋形埴輪Aや靱形埴輪が大型品で精巧に作られているのに対し、家形埴輪は概して小型で、かつ比較的簡素なものである点が注意されよう。

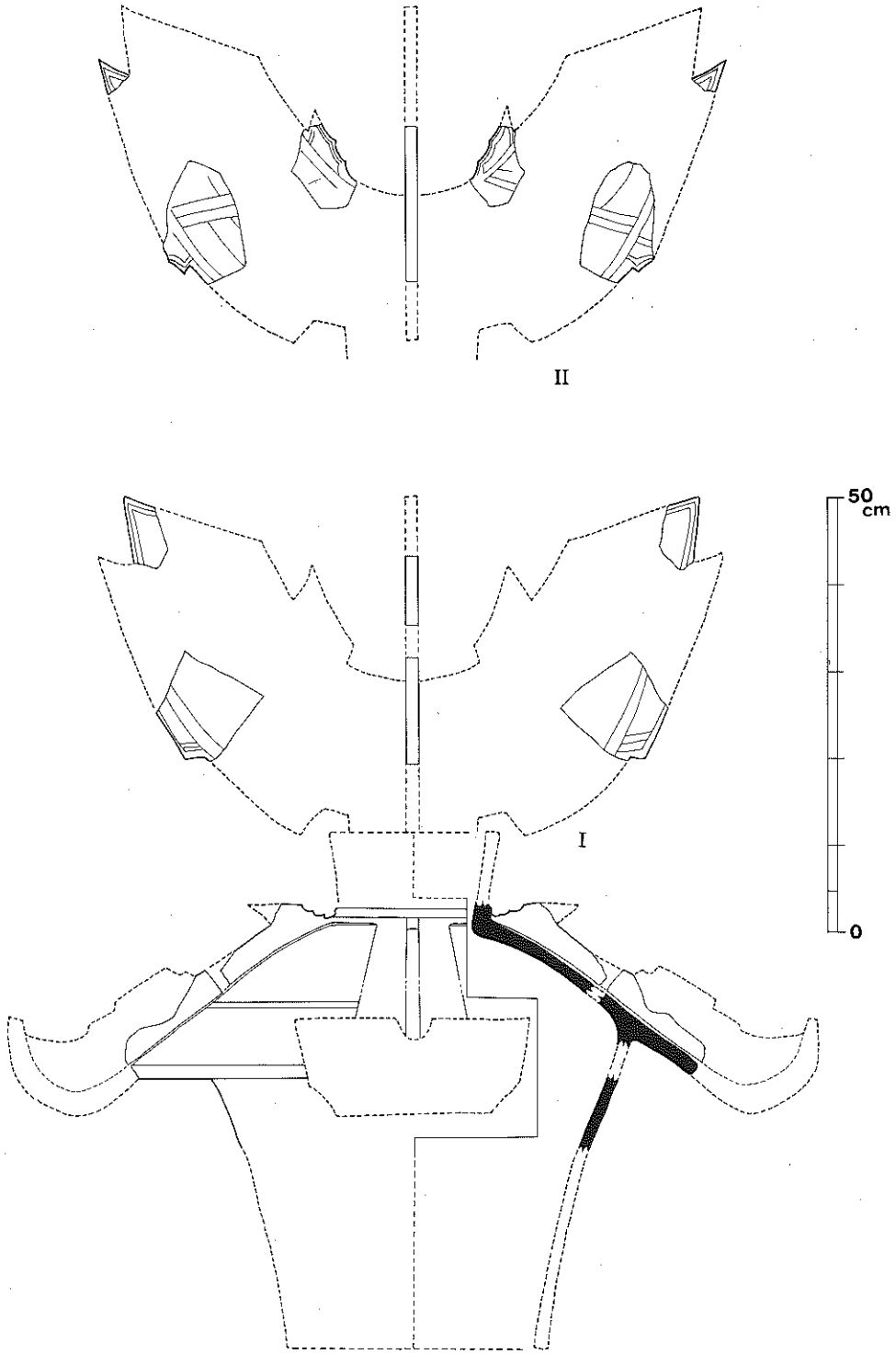
鱗付円筒埴輪については、広義の久津川古墳群中では本例が初の検出であり注目できる。

埴輪から想定できる古墳の年代は、鱗付円筒埴輪の外周調整が断続的なヨコハケを2次調整の主体とするところから、川西宏幸氏の埴輪編年^{註9}のⅡ期に該当し、実年代としては概ね4世紀後半代に比定することができよう。

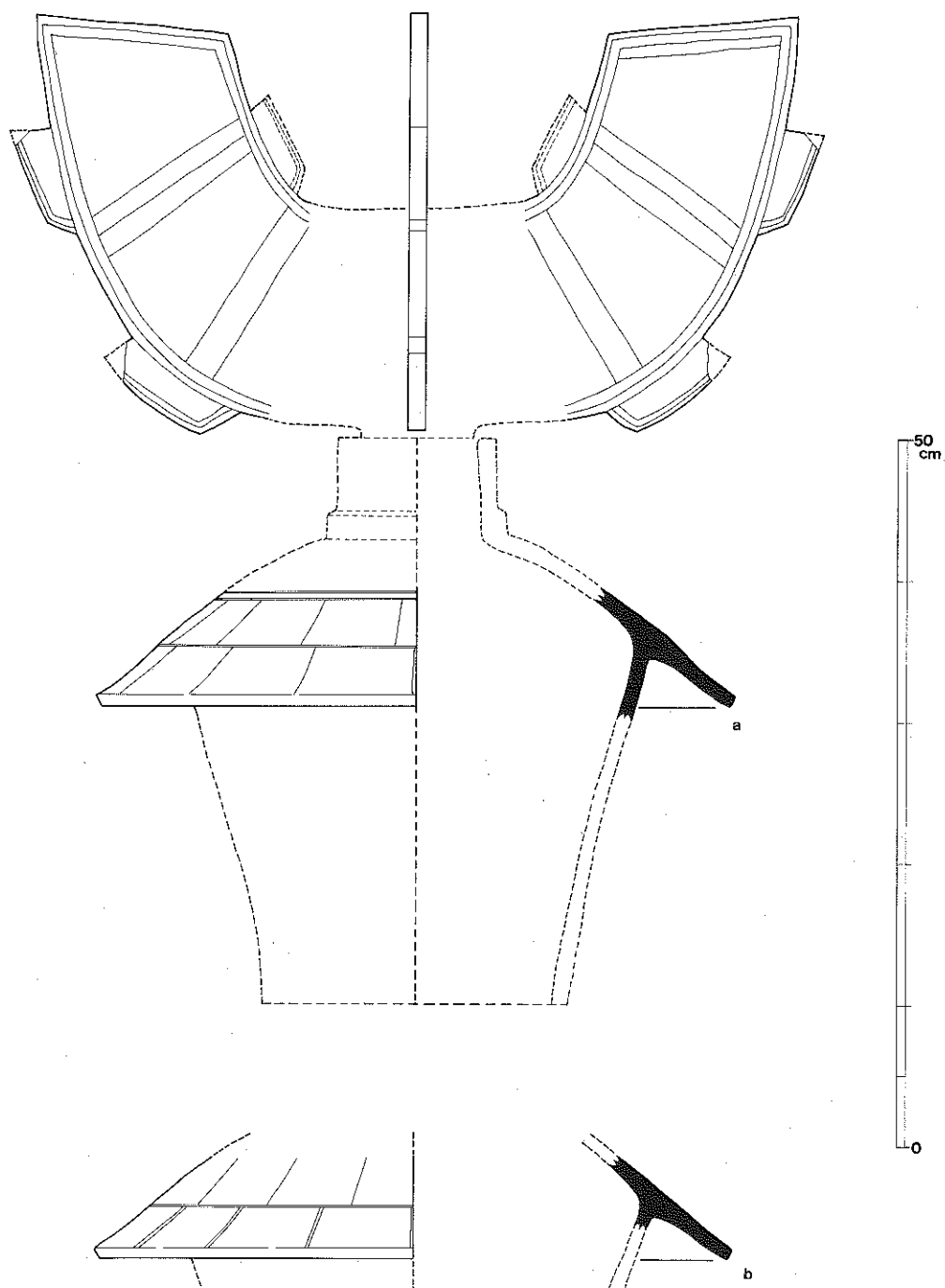
I. 庵寺山古墳平成元年度発掘調査概要



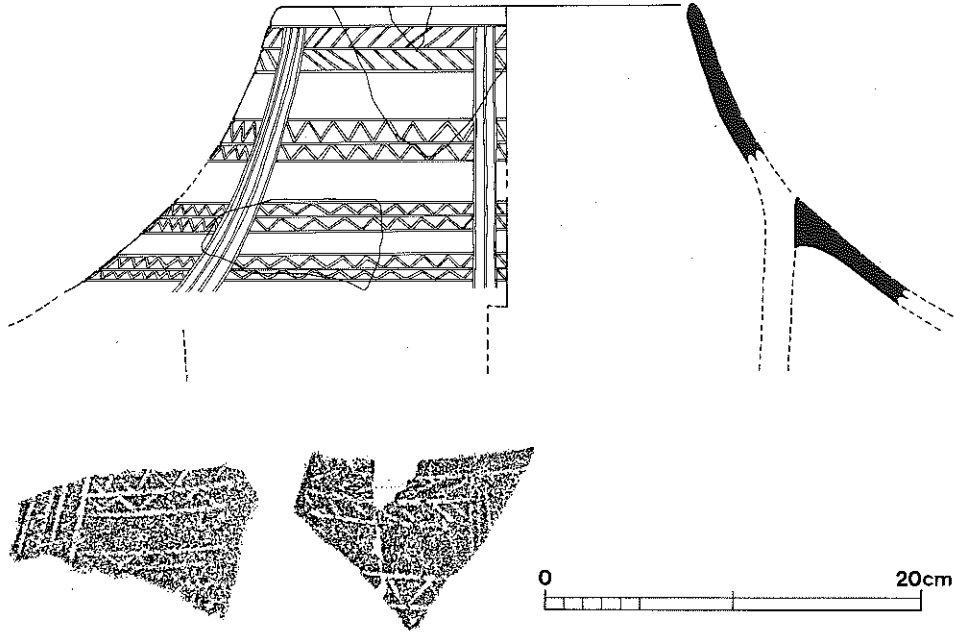
第24図 蓋形埴輪実測図



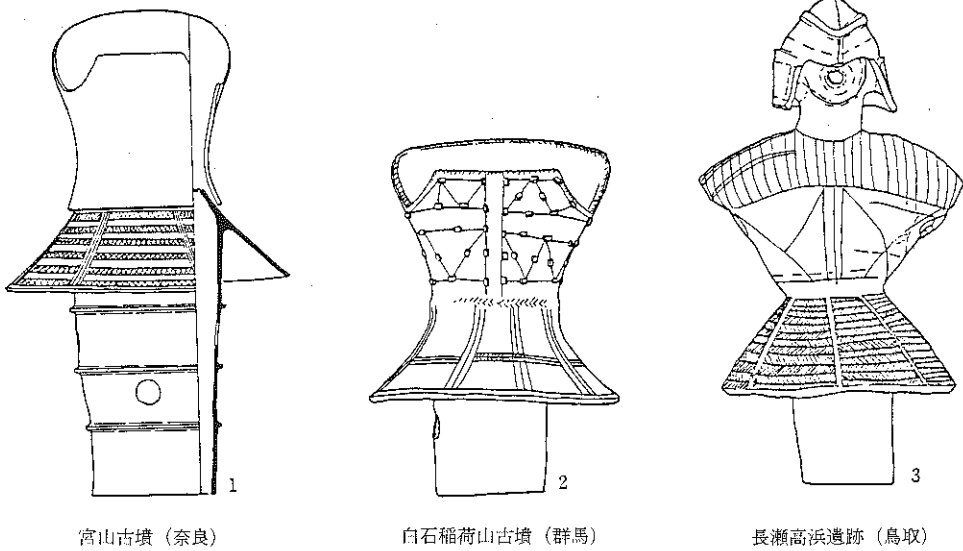
第25図 蓋形埴輪A復元図



第26図 蓋形埴輪B復元図



第27図 甲冑形埴輪実測図



富山古墳 (奈良)

白石稲荷山古墳 (群馬)

長瀬高浜遺跡 (鳥取)

第28図 甲冑形埴輪の類例

(註5より一部転載)

7. ま と め

庵寺山古墳の本年度予備調査の成果を簡略にのべてきたが、ここで再度整理し本報告のまとめとしたい。

A、墳形と規模

墳形及び規模については、昭和50年の調査により一定の確認ができており、今回の調査において変更すべき事項はない。墳形は円墳であり、直径56m、高さ9mを測る。但し、墳丘斜面部が未調査のため、段築の状況や葺石の状況については不明である。

B、主体部

主体部については、墳丘のほぼ中心に今回1基を確認した。墓壇掘方は、東西5.2m、南北11.7mを測る大型墓壇であり、その中央部に粘土槨を設ける。粘土槨の規模については、未確認である。墳頂における主体部基数がこの1基だけか否かについては、トレンチ配置の状況より確定できず、今後の課題として残った。

また盗掘の状況については、粘土槨中央部が幅2m弱、長さ推定で3m程の範囲で完全に掘り返されており、しかも盗掘回数は複数であることが理解できた。遺存する部分は、粘土槨の両端に限られる可能性が高い。

副葬品については、一切出土していない。

C、墳頂部の埴輪列

墳頂部の墓壇掘方にほぼ重複して方形の埴輪列の一部を検出した。使用埴輪は器高90cm程の簀付円筒埴輪である。また、盗掘壇内より家形埴輪・蓋形埴輪・甲冑形埴輪等の形象埴輪を含む多量の埴輪が出土した。状況的にこれらの形象埴輪は墳頂の方形埴輪列ないしはその内側に立てられていたものである可能性が高く、本墳の埴輪の状況を窺う良好な資料となりえるものである。

D、古墳の年代

古墳の年代を窺う良好な資料に乏しく、現時点では埴輪の編年観より比定し得る4世紀後半代の幅の中でも新しい時期にその年代を求めておきたい。

E、結 語

以上、今回の予備調査で知り得た事柄についてその概要をとりまとめた。庵寺山古墳については、墳丘部分の発掘調査は今回が初めてのことであり、必然的に限定的な予備調査とならざるを得なかった。このような限られた状況の中で、主体部の位置や構造・墳頂部埴輪列の確認、そして多くの埴輪資料を得ることができたのは、大きな成果であったと言わねばな

らないだろう。しかし、反面、前述したごとく残された問題もまた多いことも事実である。

庵寺山古墳の実態解明については、本年度の予備調査結果をもとに、今後の調査計画を策定し、更に数次にわたる調査が必要となろう。今後とも本墳調査に対しての関係各位及び関係機関のご協力をお願いし、本報告のおわりとしたい。

(註)

- 註 1. 庵寺山古墳周隍調査会『庵寺山古墳周隍調査の記録』、1976年。
- 註 2. 鐘方正樹「宇治市一里山出土の古式円筒埴輪」『京都考古』第41号、1985年。
- 註 3. 猿向敏一「宇治市一里山東古墳の須恵器」『京都考古』第44号、1987年。
- 註 4. 収蔵品の実見については、菱田哲郎氏の手を煩わした。
- 註 5. 高橋克壽「器財埴輪の編年と古墳祭祀」『史林』71巻2号、1988年。
- 註 6. 岩崎恭典「庵寺山古墳実測調査」『伊勢田塚陶棺発掘調査報告書』伊勢田塚調査会、1973年。
- 註 7. 註1に同じ。
- 註 8. 収蔵品の中にある小型の立ち飾りは、羽根のほぼ1枚分が残っている。実測をしていないため、正確には図示できず、示したものは略図よりの復元である。
- 註 9. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻第2号、1978年。

Ⅱ. 五ヶ庄二子塚古墳平成元年度発掘調査概要

1. はじめに

五ヶ庄二子塚古墳(以後、二子塚古墳という)は、宇治市五ヶ庄大林の西方寺境内に現存する全長110mを測る大型前方後円墳で、古墳時代後期としては京都府下最大級を誇る。

古墳は、墳丘部分が竹藪となっており、墳丘の西と南側に周濠と堤の一部が遺存している。墳丘の北及び東側については、工場や家屋そして京阪電鉄宇治線の鉄道敷があり、旧状をほとんど留めていない。墳丘については、後円部が大正初年に土取りにより削平されており、現在は、前方部のみが往時の姿を留めている。昭和60年夏、前方部南西側の堤外方の調査で本墳には現在に残る濠の外側に幅12m程の外濠が存在することが判明した。外濠はすでに完全に埋没しており、現状ではその痕跡も一部を除いてほとんど知ることができない。しかし、この調査によって、本墳が後期では全国的にも数少ない2重周濠を備える100m級の前方後円墳であることが判明し、本墳の重要性が急速に認識され始めたことは事実である。

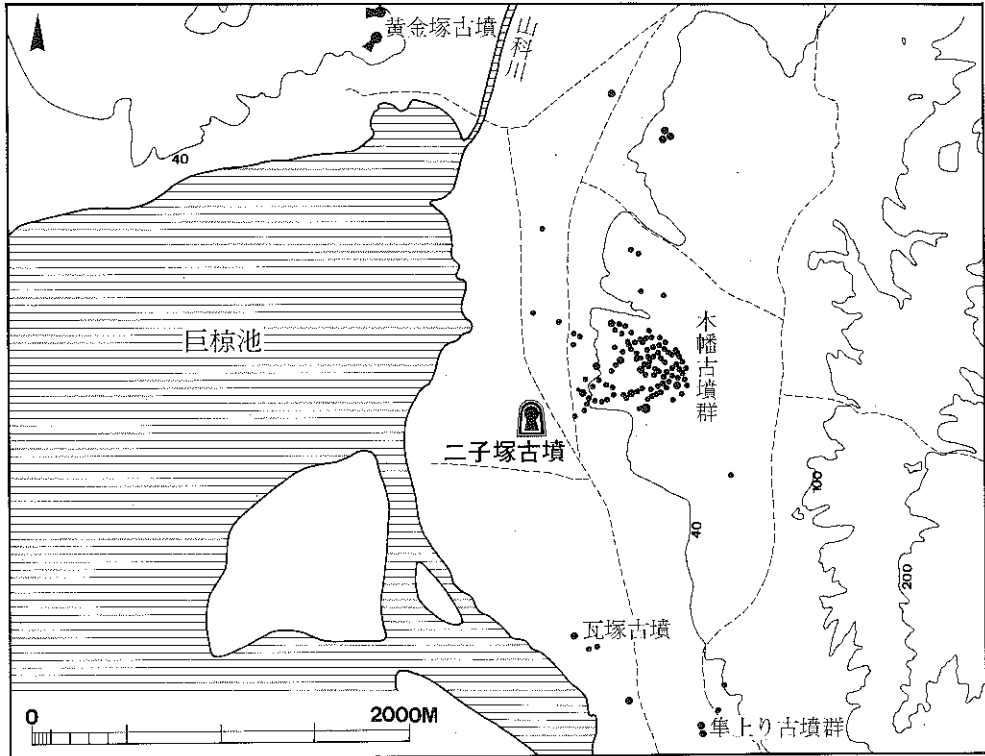
近年、二子塚古墳の周辺で急速に開発が進むなか、本市教育委員会では、本古墳の保護に係る資料収集を計るため、早急に内容把握を中心とする発掘調査実施の必要を認め、昭和62年度より国庫補助金及び京都府補助金を導入し計画的に調査を実施することとなった。

初年度である昭和62年度は、大正年間に削平された後円部の残存状況の確認を主目的として発掘調査^{註1}を実施した。この結果、後円部は、段築2段目以上が完全に破壊されているものの、それより下部は地下に完全に埋没し遺存していることが判明し、墳丘全長についても概ね110m前後に想定できる可能性を見出すことができた。また、後円部中央において、墳丘盛土を穿った大型掘方内に大ぶりの礫を充填した施設を検出し、石室の基礎地業遺存の可能性を窺わせた。

2年度目である昭和63年度は、昨年度後円部中央で検出した施設の性格と規模の確認を目的として発掘調査^{註2}を実施した。この結果、性格不明施設は、かつて存在した横穴式石室の基礎地業であることが理解され、その規模は、東西約20m、南北約10.5m、深さ約2mを測り、その中に礫をぎっしりと充填した大変堅牢な施設であることが判明した。石室基礎から推測できる横穴式石室は、かなりの規模を誇ったものであった事はまちがいがなく、本墳の壮大さを再認識させるものであった。また、この年度では、今後の調査に備え、本墳の測量と測量用基準杭の埋設も併わせて実施した。測量図については、本報告より使用している。

このように過去2年度にわたって、削平された後円部での調査を実施したが、3年度目である平成元年度においては、周辺部調査の一環として、墳丘の西及び南側に「L」字形に遺存する堤の部分に調査対象を移すこととした。

II. 五ヶ庄二子塚古墳平成元年度発掘調査概要



第29図 古代の地形と周辺の古墳

堤上は、草木が茂り、最近まで行なわれた壁土採取や排土等の投棄により部分的にかなりの凹凸が認められる。特に西南部分の土取りは大きく、堤の幅が半分程まで減じている所が認められる。また、西北端部と南東端部は、部分的に堤が盛り上っており、これらの盛り上りがいかなる状況によるものなのか、地表観察では注意を引いた。

本年度の調査は、現在「L」字形に遺存する堤全域において、その遺存状況と構成を把握することを主目的とした。濠は、現在も西側に広がる水田の灌漑用水として水をたたえているため、調査範囲は自ずと限界があったものの、築堤の状況及び濠の利用について多くの知見を得ることができた。

今回の調査を実施するについては、岡屋水利組合を始め多くの方々のご協力をいただいた。記して感謝申し上げる。

また、本年度の調査において出土した遺物及び各資料については、一括して宇治市教育委員会が保管をしている。

2. 位置と環境

(二子塚古墳の位置)

二子塚古墳の所在する五ヶ庄大林付近(岡屋)は、ゆるやかに西に向かって低くなる沖積台地となっており、二子塚古墳付近の標高は21~28m程となっている。古墳の西400mには宇治川が北流し、北1kmあたりには山科盆地を南下してきた山科川が流れている。宇治市域の宇治川東岸部分を我々は宇治市東部と呼んでいるが、二子塚古墳の位置するところはその中でも北端部分にあたり、山科盆地と接する地域である。

宇治川の西側にはかつて巨椋池と呼ばれる巨大な淡水湖が存在していた。湖は昭和16年の干拓終了によって現在は水田と化した。二子塚古墳は、この巨椋池に主軸を平行にして築造されており、墳丘頂からは、今でもかつての巨椋池を通して対岸の向日丘陵・男山丘陵そして北摂津の山丘を望むことが可能である。

近くの遺跡には寺界道遺跡・宇治郡衙推定地・木幡古墳群がある。寺界道遺跡は二子塚古墳の南側に広がる縄文から平安時代に至る集落跡であり、昭和60年にその一部が調査されて



第30図 五ヶ庄二子塚古墳と周辺の地形

II. 五ヶ庄二子塚古墳平成元年度発掘調査概要

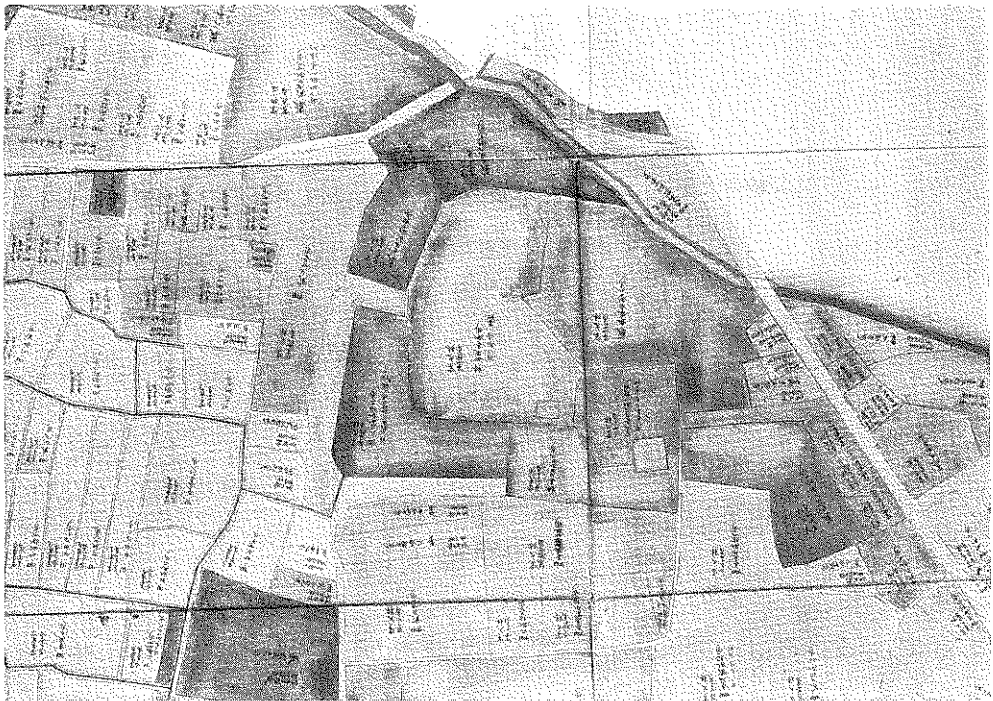
いる。宇治郡衙推定地は古地名からその存在が推測されているところであり、土器片、古瓦片を採集できる。また、木幡古墳群は、二子塚古墳東方の丘陵上に密集する古墳群であり、現在120基程の円墳が宮内庁の宇治陵墓として管理されている。

(文献に登場する二子塚古墳)

二子塚古墳は、平安時代の貴族の日記の中にその名を散見することができる。まずは、藤原忠実が著した『殿暦』の康和5年(1103)7月24日条に「二子墓」と記され、次いで忠実の子藤原頼長が著した『台記』の久安6年(1150)9月26日条には「二子陵」と記されている。この兩日記にでてくる「二子墓」なり「二子陵」は、文面よりこの二子塚古墳と同一のものと見てまちがいない、平安末期においてはこの古墳の存在が当時の貴族の間に知られていた事がわかる。また、江戸時代の宝暦4年(1754)に出版された『山城名跡巡行誌』の第6には「二子塚 在岡屋」とあり、現在我々が使用する二子塚の名称は概ね近世には確立していたと考えられる。このように、本墳は古くより著名な古墳であったことがわかる。

(明治の地籍図)

明治初年頃のものと思われる二子塚周辺の地籍図が現在宇治市に残されている。この地籍には地割りと地目とが記されており、これより当時の二子塚古墳の状況を知ることができる。墳丘部分の地割りは概ね前方後円形となっており、地目は林とある。周濠は前方部前面及び



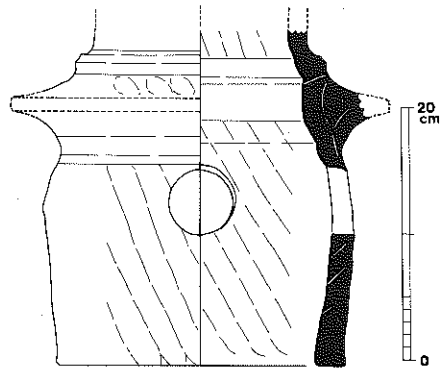
第31図 五ヶ庄二子塚古墳周辺の地籍図(明治初年頃、上が北)

西側に「L」字形に描かれ、それを囲む堤が表現されている。後円部の西・北側にも竹藪として周濠・堤の痕跡を看取できる。また、周濠の西側には田・畑として長細い地割が認められ、これがおそらく外濠の痕跡を示していると思われる。このように、明治初年頃の二子塚古墳は墳丘がほぼ完存しており、周濠・堤・外濠の一部及び痕跡をかなり良好に残していたことが理解できる。なお、遺存する周濠・堤は現在の状況とほぼ等しいと思われ、周濠の大半の埋没は江戸時代以前であったことがわかる。

(大正年間の後円部破壊)

このように、比較的良好に遺存してきた二子塚古墳は、大正3・4年に後円部が土取りにより破壊され、大きくその形状をそこなうこととなった。この破壊の報に接し大正4年5月に現地におもむいた梅原末治はその状況を次のように報告している。^{註3}「(後円部)は既ニ土砂採掘ノ為ニ其ノ大半ヲ失ヒ、(中略)凹所ノ下方ニ當リテ稍深位ニ大石三四ノ埋没シテ墳ノ主体ノ一部タルヲ思ハシメタリ。而シテ此ノ封土ノ破壊部ニハ埴輪圓筒ノ破片散在シ、マタ礫石ノ遺存スルモノ多カリシ」。梅原が現地を調査した時点では、すでに後円部の大半は破壊され、主体部のものと思われる大石が数個残っているにすぎなかったらしい。しかし、現在では、梅原が主体部の一部と考えた大石もすでになく、彼の調査後、なお少しの土取りが行なわれた事が考えられる。

梅原は、このため後円部破壊時の状況を当時の西方寺住職より聞き取りしている。それによれば、「後圓中央ノ土砂ノ採掘に當リ、基底部近ク小石ヲ積ミ重ねタル室アリ、上部ヲ覆フニ大石ヲ以テシ、マタ周圍ニモ大石ヲ置ケル構造」であつたらしく、彼は本墳の主体部が横穴式石室らしいと考えた。ただ、この石室は「發見ノ當初既ニ原形ヲ損セルノ形迹」があつたらしく、完存ではなかった可能性を指摘している。このように、本墳の主体部が横穴式石室であつたらしいことは、今回の我々の聞き取り調査からも充分可能性の高いこととすることができる。子供時代に二子塚古墳の後円部土取りを突見した飯田武男氏(明治36年生)によれば、後円部を削った時に巨石を組みあげた構造物が発見されたということであり、東西方向に主軸をもつ横穴式石室がこの時露出した可能性は極めて高い。また、土取り以前では、ここにこのような石室があるのを全く知らなかったという事から推測すれば、石室は開口せず完全に封土中に埋もれていたと考えられる。また、竹中宏氏(昭和9年生)によれば、この



第32図 大正年間出土の埴輪

(京都大学蔵)

II. 五ヶ庄二子塚古墳平成元年度発掘調査概要

土取りによって出土した巨石を西方寺本堂裏に運んだのを母の(故)竹中みつゑ(明治28年生)が実見したといい、現在、西方寺本堂裏の庭にある巨石(3.3×2.5m)がその石であるという。この石が石室のどの部分に使用された石材かはすでに確証を欠くが、形状から考えて天井石もしくは奥壁に使用されたものではないかと思われる。他の石がその後どのようなようになったかは不明である。

遺物については、石室内より全く出土しなかったといい、わずかにこの時採集された埴輪片(第32図)が現在京都大学に残されている。この埴輪は、形象埴輪の基部にあたり、その形状より人物埴輪の一部と考えられる。

(伝二子塚古墳出土鏡)

二子塚古墳より出土したと伝えられる鏡の写真が、昭和62年に京都府内を巡回展示した「鏡と古墳」展示図録^{註4}にのっている。この写真は、樋口隆康氏が多年にわたって収集した写真資料の一つで、現物は不明であるという。図録によれば、直径12cmの四乳四獣形鏡とあり、鏡周囲の錆化が著しい。仿製鏡である。

(宇治市史編纂に伴う墳丘測量)

昭和46年になって、宇治市史編纂に伴って二子塚古墳の測量調査が実施され、その成果が『宇治市史 第1巻』に報告されている。この測量が本墳にとっては初めてのものであり、本報告においてもその測量図を使用している。

市史ではこの測量成果を次のように報告している。「墳丘の全長は105mにおよび、前方部の幅は80mでかなり広がり、高さも11.5mと比較的高いことが判明した。後円部を図上で復元すると直径60m、残丘の高さは9.5mである。墳丘裾には段築が認められるが、墳丘のまわりには、



第33図 五ヶ庄二子塚古墳昭和46年測量図

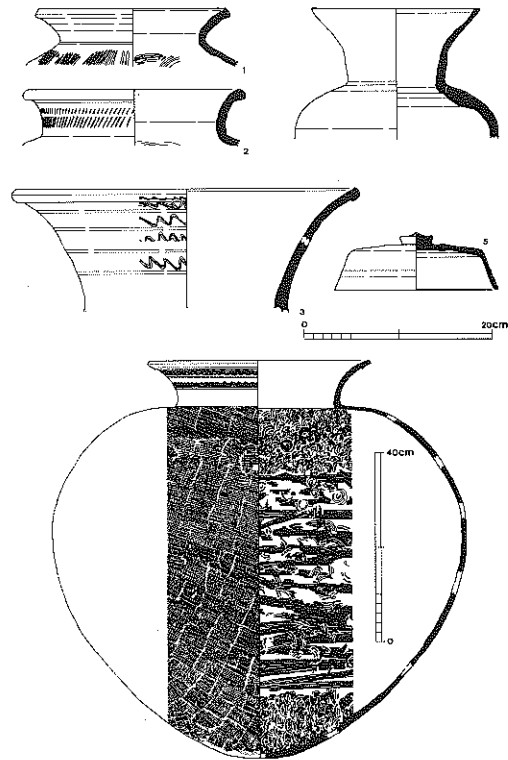
現在の南西角を中心に幅23mの濠が鍵形に残っている。この濠の幅の周滯は前方後円墳の墳丘をひとまわりしていたと推察される。また周滯の外側には幅14mの堤防がめぐらされている。この測量による墳丘等の各数値については、今後、二子塚古墳の調査が進展する中で変更されていき、より正確なものへと向わねばならないが、とにかくにも、測量調査によって本墳が100mを越す規模の大型前方後円墳である事を証明できたことは大きな成果であった。

(外濠の発見)

昭和60年の夏、外濠の発見により、本墳が2重周濠を備える古墳であることがわかった事は、前述した。この調査成果については、すでに本市教育委員会が「二子塚古墳外濠発掘調査概要^{註5}」として報告しているので詳細はこの報告にゆずり、ここではその成果を略記したい。

外濠を発掘調査で確認した地点は、現在残る堤の角の南側である。外濠は素掘りの幅約12m、深さ約1.5mの規模を測る。濠底には粘土層が認められ、一定時間、この外濠が滞水していた事が窺えた。濠内からは、須恵器・土師器・埴輪が出土し、これらの遺物より外濠が埋没したのは奈良から平安時代にかけての頃であることが推察された。

外濠の調査については、調査範囲が狭く、この濠がどの程度の広がりをもって古墳を取り巻くのかは、今後の調査をまたなければならないが、現在の地形からでも一定の推測は可能である。まず、前方部前面であるが、これは外濠の発見地点が前方部前面側であるため、この部分には存在していると見てよい。地形より外濠の存在が予測できるのは、古墳の西側である。この部分は、明治の地籍図において堤にそって長細い地割が認められ、現在においてもその地割は道路・宅地として存在している。外濠部分にあたる場所は、現在家屋が建っているが、その前は水田であったといい、この水田は周囲より一段低かったという。この水田の東西長は約10mであったという。現状の中では、この地割りを外濠の名残りと見るのが最も可能性が高い。古墳の東側は西に比べ7m程も高く、この部分に外濠が存在するか否かは今後の解決すべき点の一つである。



第34図 外濠出土の須恵器

II. 五ヶ庄二子塚古墳平成元年度発掘調査概要

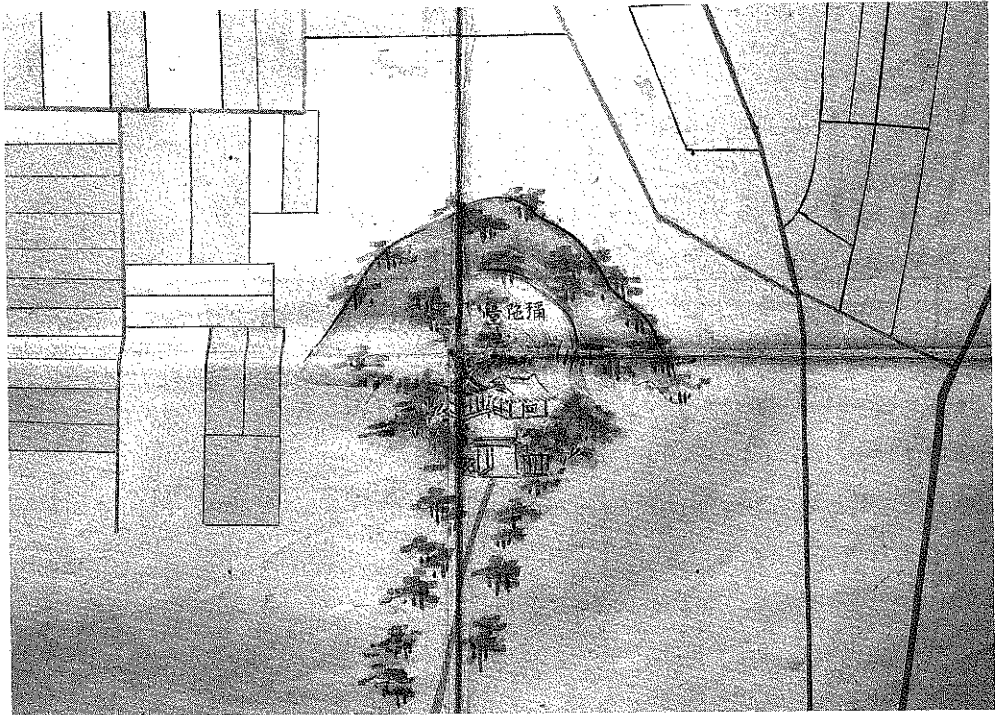
(西方寺)

西方寺は、現在、浄土宗に属するが、かつては天台宗の寺であったという。開基創立については確認されていない。当寺は、「弥陀次郎」とも呼ばれる。これは、『山域名勝志』や『都名所図会』などが記すように、当寺本尊の阿弥陀如来にかかる縁起である「弥陀次郎伝説」から、このように俗称されるようになったものである。萬福寺が所蔵する「萬福寺山内古図」においては、当寺は「弥陀堂」と記されている。

この阿弥陀如来を本尊として信仰を集めた西方寺は、近衛家から毎年回向料の寄進を受け、そのつながりは、終戦まで続いていた。本堂の裏には、関白近衛兼経墓と伝える墓石が建っている。

前述の「萬福寺山内古図」が記す西方寺裏には、小山が描かれている。おそらく、二子塚古墳の墳丘を描写したものである。地元では、古墳を「ダンノヤマ」、濠を「ダンノイケ」と通称しているという。

古墳の東側周濠が、いつ頃埋め立てられたかは、西方寺の創立と深くかかわっていると思われるが、現時点ではその時期を明確にできない。但し、諸文献や古図などより、江戸時代の前半には現在の位置に西方寺が営なまれていることはたしかであり、さらにどこまで遡り得るかについては、各方面からの検討が必要である。



第35図 「萬福寺山内古図」に描かれた西方寺と二子塚古墳

3. 調査の経過

調査は、まず堤全体にわたって生い茂る雑草を伐採することより始め、その後、発掘調査地点の選定を行なった。今回の調査の主目的が築堤状況の確認であるため、トレンチは、堤と直行する状態で設定することとし、地表観察により注意を引いた地点及び築堤状況の把握が容易な地点を選び出すこととした。

トレンチ設定した地点は、「L」字形に残る堤の東西部分に4地点、南北方向に4地点の計8地点である。トレンチ番号は、平成元年度を示す01を頭にし、その後算用数字にて番号を標記することとした。番号は、東西方向の堤に設定した東端のトレンチを01-1とし、南北方向の堤に設定した北端のトレンチを01-8とし順に付した。

トレンチの中で、01-1・2トレンチと01-8トレンチは、堤上の盛り上りの性格を把握するために設けたトレンチである。

トレンチの幅は1.5mを基本とし、地形に合わせて適宜に広げることとした。また長さも堤を完全に横断できるよう心がけたが、01-6・7・8トレンチについては堤が民家と隣接しているため、長さを堤の中期までとすることにした。

掘削にあたっては、表土及び後世置土については、ミニパワーショベルにて排除し、後はもっぱら人力による掘削とした。

掘削開始後、直ちに各トレンチで黄褐色系の良質な砂質土ないし粘質土を検出した。当初の段階では、本層が余りにも均一な土質であるため、築堤当初の盛土と判断し、当層上で埴輪等の検出を試みたが、01-5・8トレンチにおいて、当層中より近世の陶器片や瓦片が出土したため、当層下に本来の堤が埋もれていることが判明し、直ちに各トレンチにおいて断ち割りを行ない、当初の堤の埋没位置の確認作業に移った。特に01-8トレンチにおいては、この黄褐色系の近世盛土層が厚さ最大で3mにも及ぶことが理解されたため、作業の安全確保の観点から、掘削を途中で断念せざるをえなかった。また、逆に01-1・2・3・4トレンチの断ち割りについては、濠の漏水を避ける観点から深く掘削することをひかえた。

掘削が概ね終了に近づいた時点で、写真撮影及び実測作業を行ない調査記録を作成した。あわせて関係者説明会を1週間の期間で設定し、現地を公開することとした。

埋め戻しについては、濠が灌漑用水として利用されている点を考慮し、まず土のう袋において保全を行ない、後にパワーショベルにて土砂を投入した。

今回の調査は、平成元年11月27日より開始し、同2年2月26日にすべての現地作業を終了した。調査面積は280m²である。

4. 遺 構

堤は、今回の調査結果から大きく2時期に分けることができる。すなわち、古墳築造に伴う築堤と、近世の堤改修である。以下、それぞれについて説明をしたい。

(堤の構造)

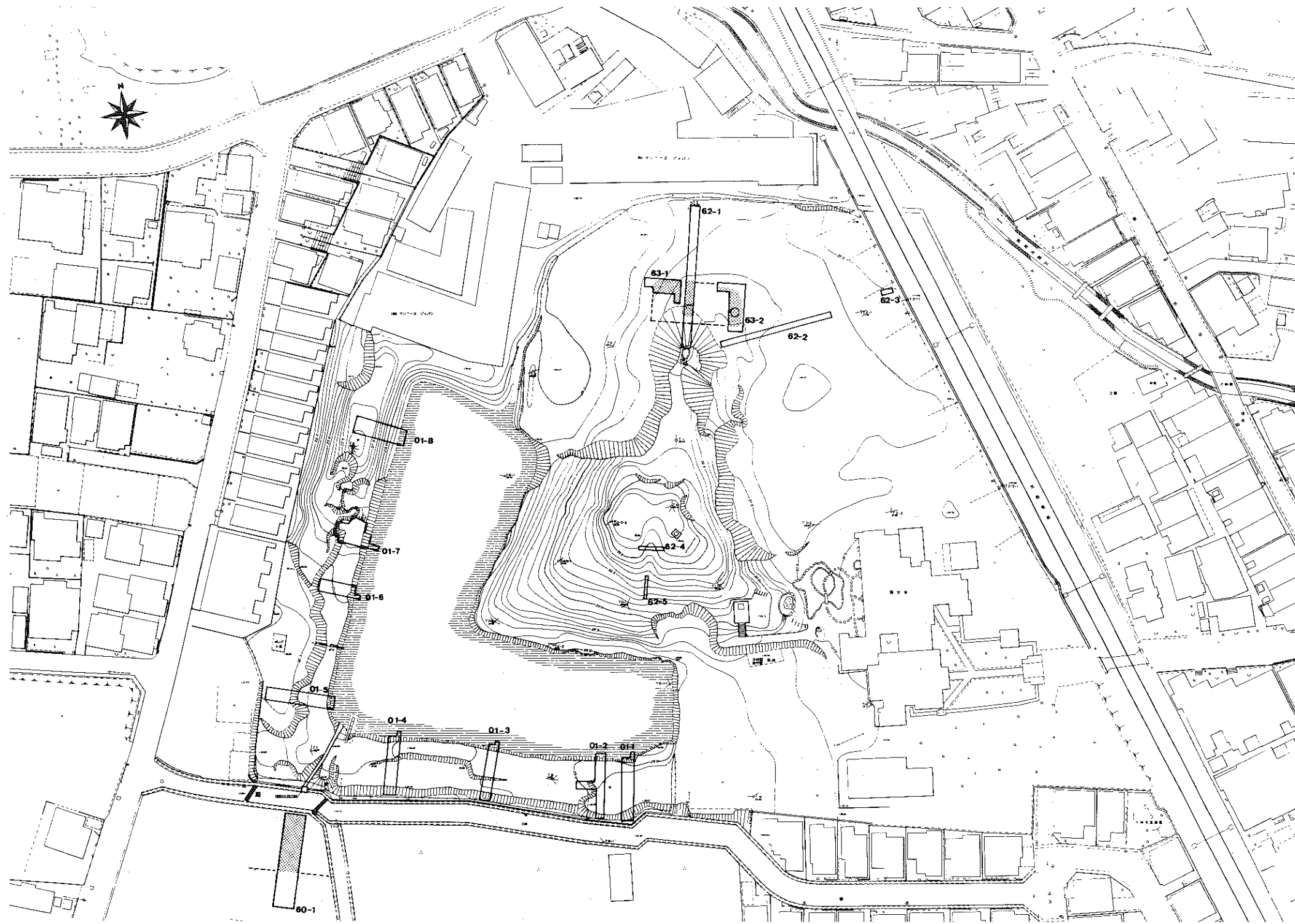
堤は、現状では前方部南側で幅12m、高さ約2m、西側で幅18m、高さ4～7m程として残っている。この現在の姿は、近世盛土ないしそれ以後の土取りによって旧状をそのまま留めていず、当初の堤(以後、堤という)は、近世盛土下に埋没した形となっている。

堤は、地山上に盛土をして構築されており、地山面の高さは、01-1トレンチ南端で標高23m程、50m程西の01-4トレンチ南端で22m程、更に30m西の01-5トレンチ西端で21.5m程と西へ向う程低くなっている。盛土は、遺物を含まない黒色土・暗褐色系の土、黄褐色系粘質土を概ね交互に厚さ20～50cm程で水平方に積み重ねている。現存する堤の上面の高さは、01-1～4トレンチで標高24～24.5m程であり、01-5・6トレンチで23.5～24m程、01-7・8トレンチで25m程となっている。各トレンチの中で最も旧状を良く留めていた所は01-8トレンチであり、ここでの頂部平坦面の標高は25.3mとなる。築造当初、堤上面が水平に造られていたと仮定すれば、01-1～6トレンチにおいては、近世の盛土以前に1～2m程すでに削平されていたこととなる。

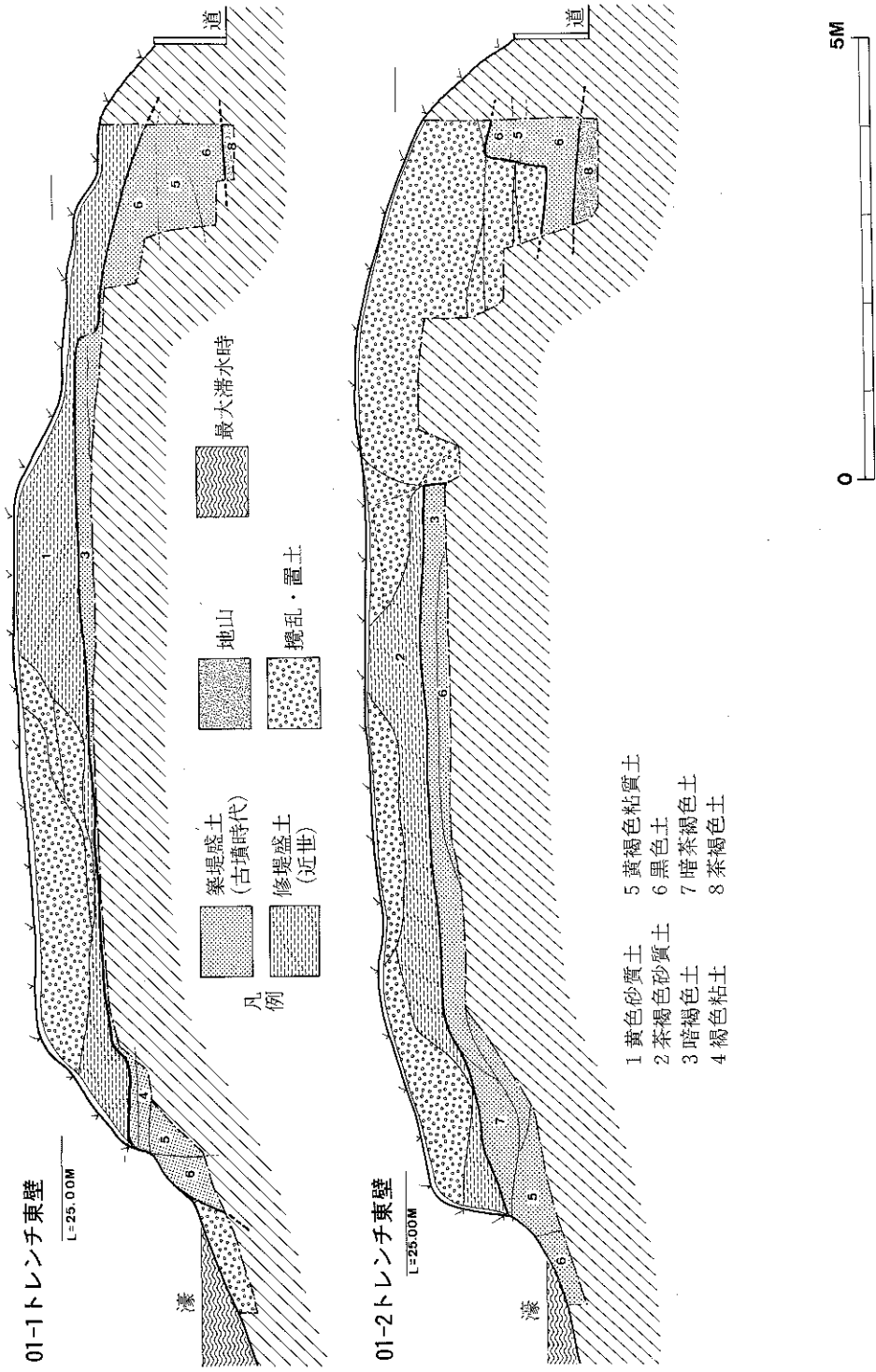
また、原位置を保つ埴輪の検出はなかったが、各トレンチにおいて埴輪片が出土し、01-6トレンチの濠側斜面には転落した埴輪がまとまって認められたため、かつては堤上面に円筒埴輪を主体とする埴輪が樹立されていたことはまちがいない。前述したごとく、濠には今も水がたたえられているため、堤斜面の調査が一部に限定され、斜面に葺石が使用されていたか否かについては確認できなかった。

(近世の修堤)

近世後期になって、この堤上に大規模な盛土が行なわれ、堤が修築されていることが明らかとなった。この盛土は、黄褐色系の良質な砂質土ないし粘質土によって実施されており、01-8トレンチの状況から2度にわたって行なわれたことが理解された。近世盛土は、01-1～7トレンチでは約1m程、01-8トレンチでは3m程の厚さを持ち、完全に当初の堤を被覆している。この近世盛土が民家の壁土に適しているため、以前はよくここから土取りをしたといい、また、近くの池を埋めるためにもかなりの量の土取が行なわれ、数十年前と比べると堤はかなり高さを減じたという。近世の盛土がかつてどの高さまで行なわれたかは、すでに知るよしもないが、その最高点が01-8トレンチ設定部分であることは確かであろう。

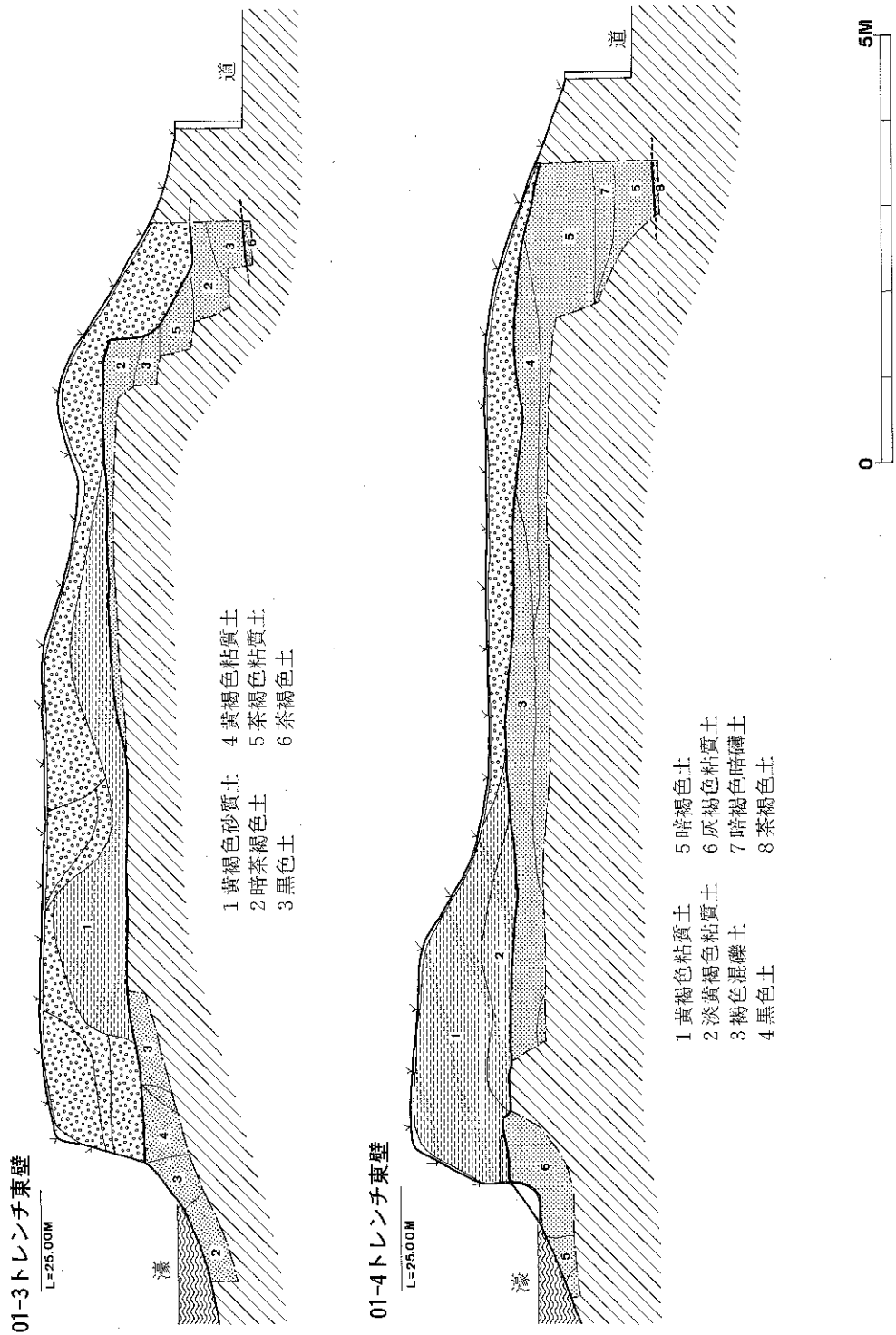


第36図 五ヶ庄二子塚古墳測量図(S=1 : 1,000)

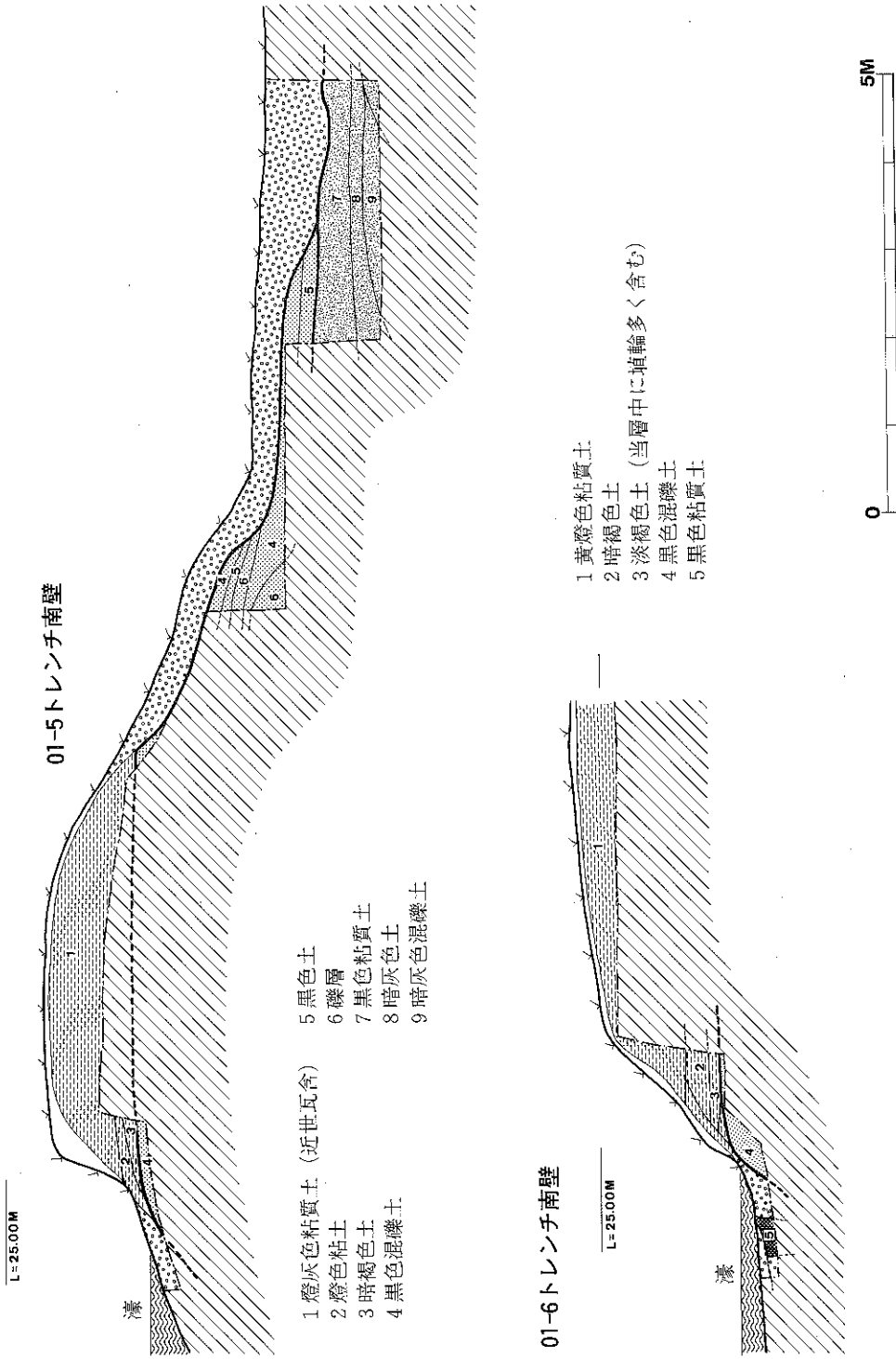


第37図 トレンチ土層図 (I)

II. 五ヶ庄二子塚古墳平成元年度発掘調査概要

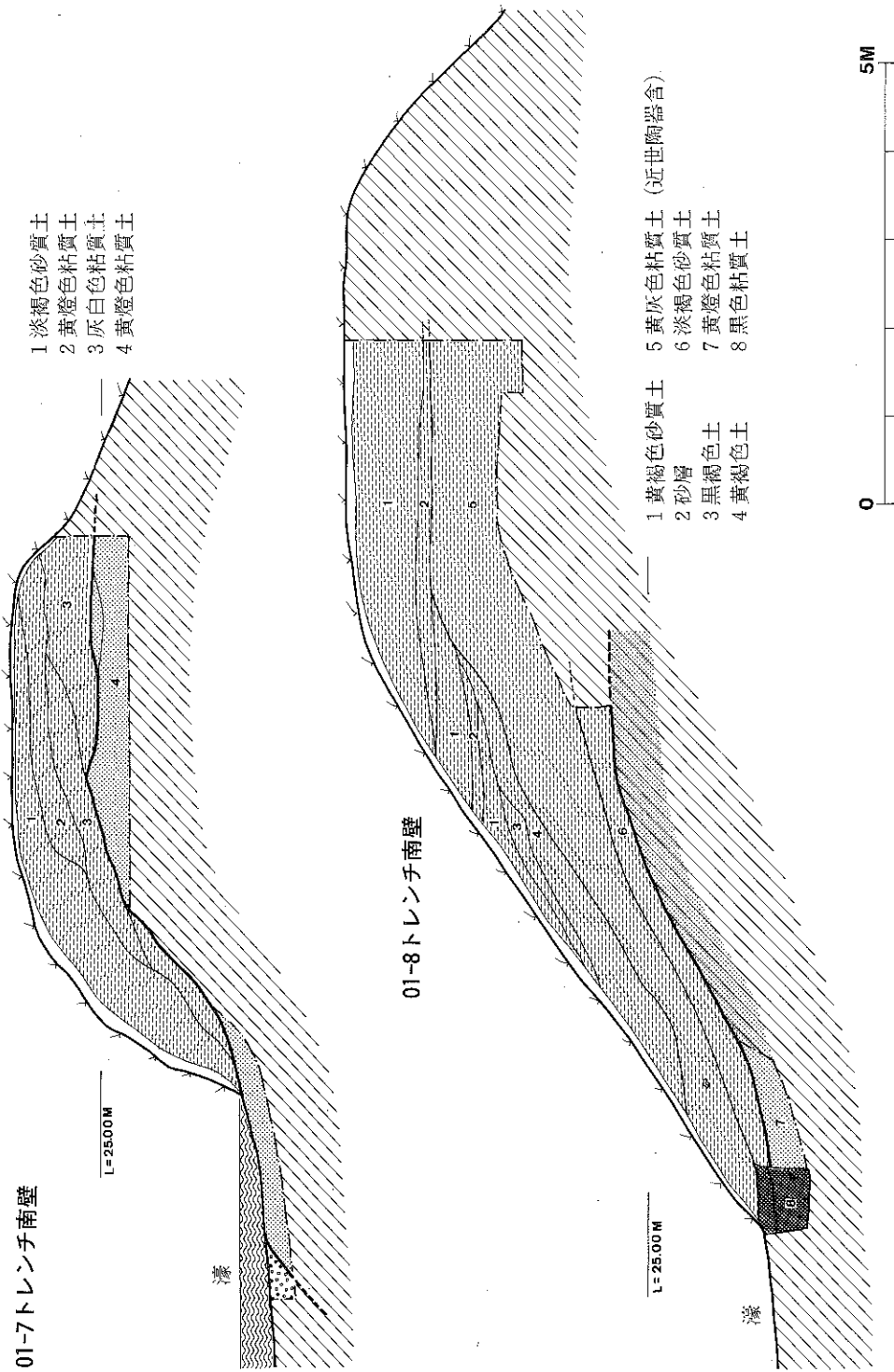


第38図 トレンチ土層図 (2)



第39図 トレンチ土層図 (3)

II. 五ヶ庄二子塚古墳平成元年度発掘調査概要



第40図 トレンチ土層図 (4)

5. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、埴輪を主体に近世陶器・近世瓦片及び縄文土器であり、コンテナに2箱程出土している。

(埴 輪)

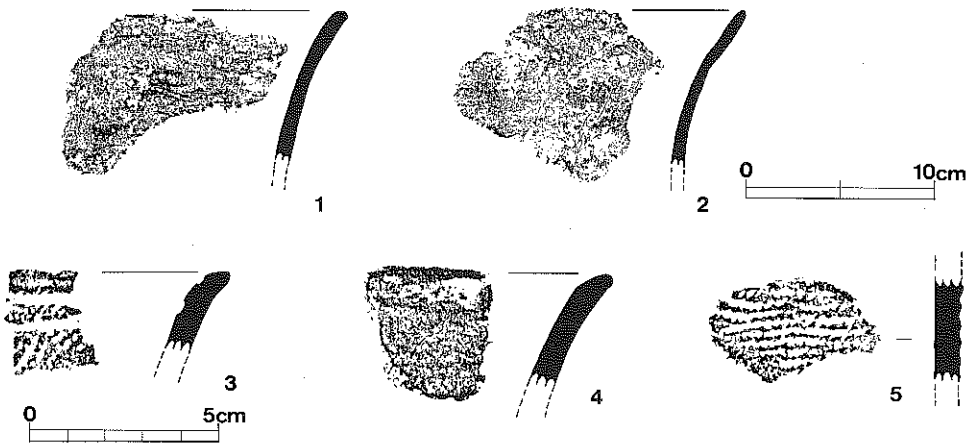
埴輪はいずれも円筒埴輪断片で、全形を窺える個体はない。表面は、いずれも1次調整のタテハケのみのもので、内面はナデ調整される。タガは低い断面台形状のものが主体であり、最下段のタガには、ほとんど高さをもたないものもある。透し孔は円形であり、破片観察の中では、2段目以上に穿孔されている。底部外面下端部には、ナデないし板状工具による圧痕を見出すものがあり、底部調整が行なわれていることがわかる。また、表面に黒斑を有すものはなく、一部の破片は灰色に硬く焼成されている。このような特徴を示すものは、川西宏幸氏の分類^{註6}ではV期に比定され、年代的には6世紀前半と考えられるものである。

(近世陶器・瓦)

01-5・8トレンチの近世盛土層より出土したもの(図版第34-8・9)で、いずれも近世後期以降に比定でき、近世盛土の実施時期を示す遺物である。

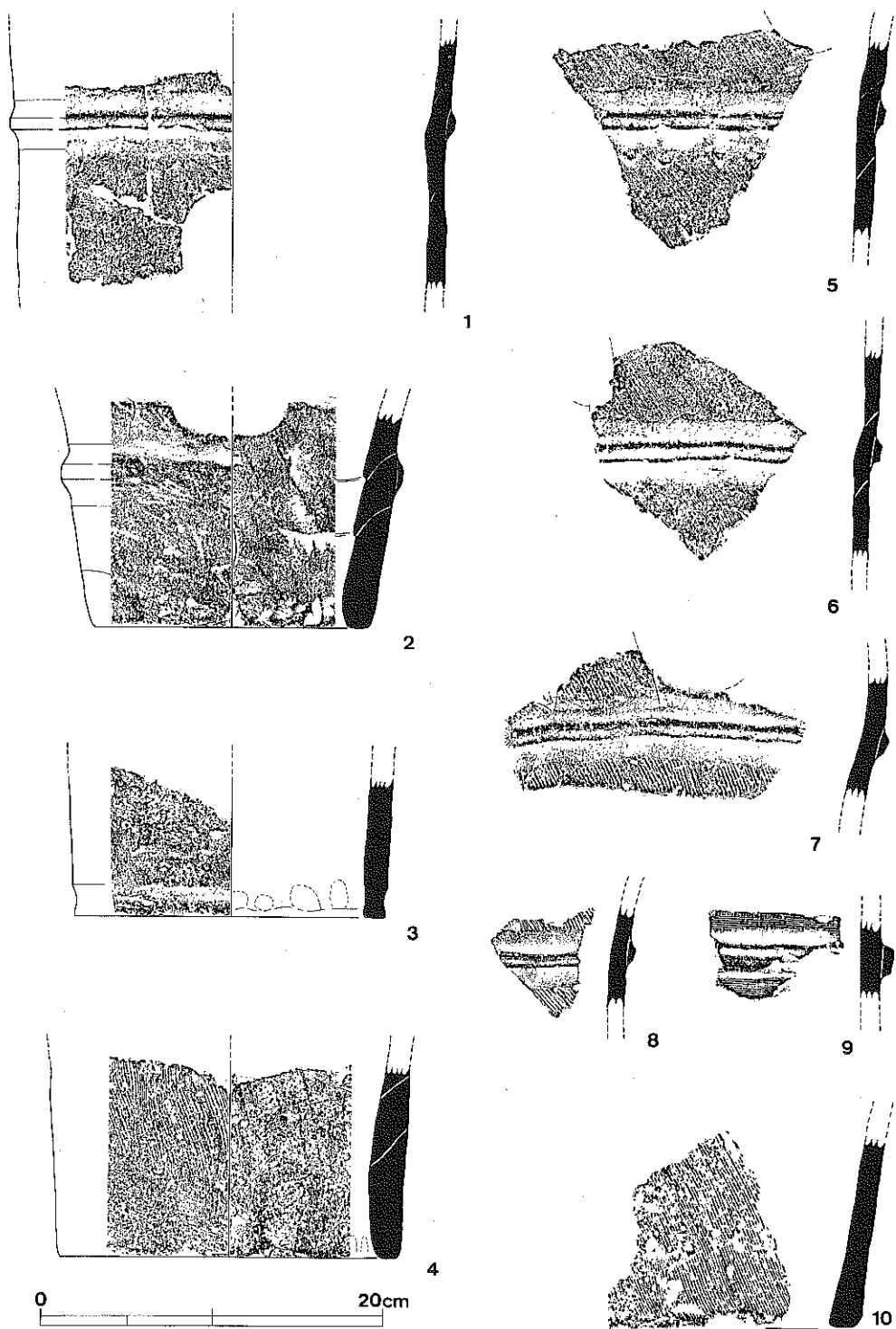
(縄文土器)

01-2トレンチ南端の地山直上黒色土層中より20片程の縄文土器がまとまって出土した。器形としては粗製深鉢が中心であり、細片の中には口縁部内面や器面に縄文を施すものが認められる。时期的には縄文後期に比定されるものであり、堤の盛土中に含まれた遺物の可能性が高い。



第41図 縄文土器実測図

II. 五ヶ庄二子塚古墳平成元年度発掘調査概要



第42図 埴輪実測図

6. ま と め

以上、本年度の調査成果の概要を述べてきたが、ここで整理を行ない、本報告のまとめとしたい。

(堤の復元)

すでに述べたように、古墳築造時の堤は、現在の堤の1～3m程下に埋没していることが判明した。但し、往時の姿を完全に残し埋没しているのではなく、近世に修堤が行なわれるまでの間にすでに一部が削平されていたらしい。

堤の幅については、濠の調査をしておらず、その基底部分が不明であるため、前方部南側の堤が幅12m以上、西側の堤で幅18m以上と現状では計測をせざるをえない。

古墳が、もともと西へゆるやかに降る緩斜面上に立地しているため、堤の上面を水平にしようとするれば、必然的に西側ほど高く盛土しなければならないこととなる。築堤当初の堤の上面の標高を01-8トレンチで検出した25.3mと仮定すれば、01-1トレンチの位置での堤の高さは地山面より2.3mと推定でき、01-4トレンチ付近では、3.3m程と推測できる。最も堤が高くなる前方部西側部においては、地山面から4m近い盛土をしなければならない。いづれにしろ、膨大な土砂が必要である。では、古墳の東側、すなわち地形がもともと高い所ではどうであろうか。この部分には既に民家等が建ち、旧地形を確認できないが一定の推測を試みることにしよう。

墳丘の東側、京阪宇治線のあたりでは、標高27m程を測るため、築堤にあたっては盛土の必要がなく、前方部南側の堤東端部分では、約1m程の盛土が必要であろうと推定できる。大雑把ではあるが、このように古墳周辺の地形から築堤の状況を推測すると、盛土による築堤が必要な所は、堤のうちでも西側及び南側に限られることとなり、他の部分では削り出しによる築堤が可能と判断できる。現時点では、以上のような推定が可能ではあるが、今後、東側部分においてもその状況を確認しなければならないことは論をまたない。

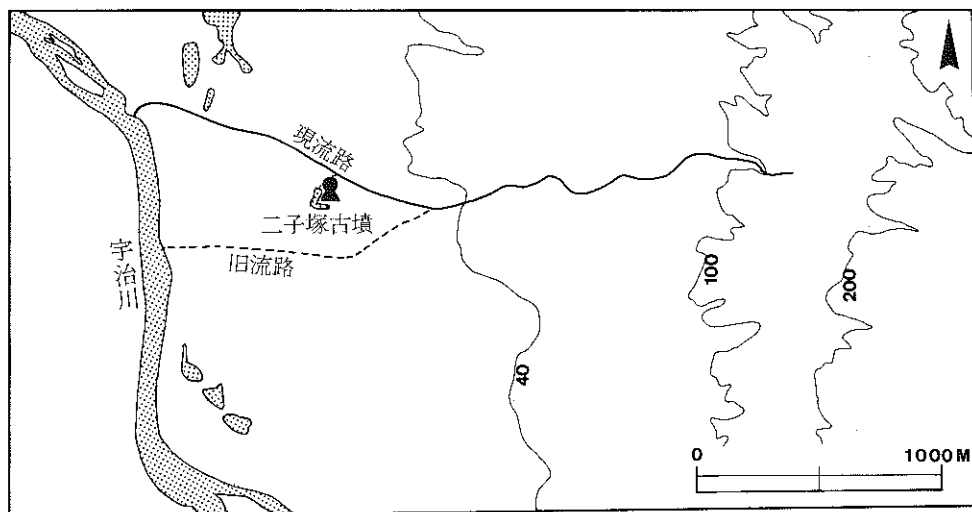
(近世修堤の意味)

近世後半に、堤は土盛りによる大規模な修築が行なわれている。なぜ、この時に改修が必要であったのか、その原因について考えてみたい。

現在、濠の水は灌漑用水として利用されており、地下水の汲み上げにより取水している。かつては、古墳の北側を流れる弥陀次郎川から取水をしており、地下水に変わったのは比較的新しいことのように見える。

江戸前期に描かれた「萬福寺寺領並びに伽藍絵図」や「山城国絵図」を見ると、弥陀次郎

II. 五ヶ庄二子塚古墳平成元年度発掘調査概要



第43図 弥陀次郎川の流路

川は古墳の南側、現在の市道沿いを隠元橋に向かって流下しており、江戸中期以降に流路変更が行なわれたらしい。旧流路^{註7}については、寺界道遺跡の調査時においてもその存在を確認している。濠をため池と利用するには、現流路からの取水しか考えられない。したがってこの流路変更により、濠をため池として利用するため、堤の改修が行なわれたと考えるのが現時点では最も可能性が高いように思える。弥陀次郎川の流路変更の状況については、現在詳細が確認できず、正確な時期等については不明であるが、今は上記の可能性を考えておきたい。

(結 語)

以上、今回の調査成果について、その概要を報告した。二子塚古墳については、なお不明な部分が多く、今後とも調査を継続してゆきたいと考える。最後に、関係各位の今後とものご理解とご協力を心からお願いし、本報告のおわりとしたい。

(註)

註 1. 宇治市教育委員会「五ヶ庄二子塚古墳昭和62年度発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第11集、1988年。

註 2. 宇治市教育委員会「五ヶ庄二子塚古墳昭和63年度発掘調査概要」『同上』第13集、1989年。

註 3. 梅原末治「五箇荘二子塚古墳」『京都府史跡勝地調査会報告』第四冊、1922年。

註 4. 京都府立山城郷土資料館他『鏡と古墳』図録、1987年。

註 5. 宇治市教育委員会「二子塚古墳外濠発掘調査概要」『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集、1987年。

註 6. 川西宏幸「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』64巻第2号、1978年。

註 7. 宇治市教育委員会「寺界道遺跡発掘調査概要」『註5に同じ』。